

# 高原町埋蔵文化財発掘調査報告書

ひ もり  
日守地下式横穴墓群  
おおたに  
大谷遺跡表採縄文土器資料

1999. 3

宮崎県西諸県郡  
高原町教育委員会

# 高原町埋蔵文化財発掘調査報告書

ひ もり  
日守地下式横穴墓群  
おおたに  
大谷遺跡表採縄文土器資料

1999.3

宮崎県西諸県郡  
たか はる ちょう  
高原町教育委員会

## 序 文

埋蔵文化財の保護・活用につきましては、日頃より深い御理解をいただき、厚く御礼申し上げます。

このたび高原町教育委員会では、個人の造成工事に際し発見された日守地下式横穴墓群の発掘調査を行いました。調査地区からは、町内初の蛇行剣などが発見され、大きな成果を得ました。又、町内でも早くから縄文時代の遺跡として認知されていた大谷遺跡についても、表採の土器についてではありますが、その遺跡の内容の解明について大きな成果を得ることができました。

今回の調査で得た様々な成果が、学術資料としてだけでなく、学校教育や生涯学習の場で活用され、埋蔵文化財の保護に対する認識と理解の一助になることを期待いたします。

最後になりましたが、この発掘調査にあたり、御理解をいただきました土地所有者の方々をはじめ、御指導・御援助をいただきました関係諸機関並びに地元の方々に、心から御礼を申し上げます。

今後とも、本町の文化財行政に対する御指導・御協力をいただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

平成11年3月

高原町教育委員会

教育長 正入木 久男

## 例　　言

1. 本書は、高原町教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 掲載しているのは、縄文時代 1 件、古墳時代 1 件、計 2 件についてである。
3. 調査関係者は、次の通りである。

### 調査主体

#### 高原町教育委員会

教　育　長	正入木　久　男
社会教育課　課　長（平成 8 年度）	益　本　忠　男
（平成 9 年度）	増　田　賢　一
係　長（平成 8 年度）	森　山　博　文
（平成 9 年度）	篠　原　弘　二
調　査　員　　社会教育課　主　事	大　學　康　宏

### 調査指導

#### 宮崎県教育委員会

文　化　課　係　長（平成 8 年度）	面　高　哲　郎
（平成 9 年度）	北　郷　泰　道
主　査	石　川　悦　雄
	永　友　良　典

4. 本書の執筆・編集は大學があたった。
5. 本書で使用した方位は、全て磁北である。
6. 調査の記録類、出土遺物等は、全て高原町教育委員会で保管している。

## 総 目 次

I. 日守地下式横穴墓群（97-1号墓、97-2号墓）	1
II. 大谷遺跡表採縄文土器資料	41

# ひもり 白守地下式横穴墓群

(97-1号墓、97-2号墓)

## 例　　言

1. 本書は、高原町教育委員会が実施した、宮崎県西諸県郡高原町大字後川内字日守10-1に所在する日守地下式横穴墓群97-1号墓、97-2号墓の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、高原町教育委員会が主体となり、平成9年2月14日から同年3月7日の延べ12日間実施した。
3. 本報告書に使用した図面及び写真について、調査に伴う測量については、その一部を赤坂光一氏（現 ジバングサーベイ代表取締役）の協力をいただいた。又、出土した鉄製品のうち、蛇行剣と鉄鎌4点については、宮崎県埋蔵文化財センター主事和田理啓氏の協力をいただいた。その他の図面・写真については、大學が作成・撮影した。
4. 周辺地形図については、平成9年8月におこなわれた、天理大学教授置田雅昭氏による電気探査において作成された図面を、置田氏の承諾を得て使用している。又、その成果についても、同氏の承諾を得て附編として掲載している。
5. 出土した遺物は、全て高原町教育委員会で保管している。

## 本文目次

例 言	2
本文目次	3
挿図目次	3
表目次	3
図版目次	4
第Ⅰ章 はじめに	
第1節 調査にいたる経緯	5
第2節 調査の組織	5
第3節 遺跡の歴史的環境及び調査状況	8
第Ⅱ章 調査の成果	
第1節 調査の概要	10
第2節 調査の結果	10
1. 97-1号墓	10
遺構	10
遺物	12
2. 97-2号墓	15
遺構	15
第Ⅲ章 まとめ	
第1節 遺構	17
第2節 遺物	17
第3節 結語	17
附 編 宮崎県高原町日守地下(立坑)式 横穴墓群のレーダ探査・補遺	
	21

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図及び広域周辺地形図	6
第2図 日守地下式横穴墓群現状地形図	7
第3図 日守97-1号地下式横穴墓遺構実測図	11
第4図 日守97-1号地下式横穴墓出土遺物実測図	13
第5図 日守97-2号地下式横穴墓遺構実測図	16

## 表 目 次

第1表 日守97-1号墓出土鉄器計測表	19
---------------------	----

## 図 版 目 次

図版 1 調査前状況	35
調査前状況(97-1号地下式横穴墓)	
97-1号墓竪坑検出(1)	
図版 2 97-1号墓竪坑検出(2)	36
97-1号墓竪坑土層断面状況	
97-1号墓竪坑完掘状況	
図版 3 蛇行剣出土状況	37
剣出土状況	
鉄鎌出土状況	
図版 4 97-2号墓竪坑検出状況(1)	38
97-2号墓竪坑検出状況(2)	
97-2号墓羨門閉塞状況	
図版 5 97-1号墓出土遺物	39

# 第Ⅰ章 はじめに

## 第1節 調査にいたる経緯

日守地下式横穴墓群は、高原町と北諸県郡高崎町との町境に位置し、標高約200mの小高い丘を中心に立地している。南に道路一つ隔てた高崎町大字前田字坂屋尾でも地下式横穴墓が3基発見されており、町名こそ違うものの、日守古墳群という一群を構成しているものと思われる。

平成9年1月26日、当時の高原町長横田修氏より担当者に地下式横穴墓が発見されたとの連絡が入った。詳細を聞くと、町長の知人である花牟礼信夫氏が苗木を植えるため、高原町大字後川内字日守10-1の原野を造成したところ、玄室部分が陥没し、発見に及んだということであった。早速遺跡発見の手続きをとり、同氏と協議したところ、事業継続の意向があった。又、地下式横穴墓は普段密閉されているため、一度開口すると内部が崩壊してしまうという点で、保存は困難と判断し、記録保存の措置をとり、発掘調査を実施した。ところが、今回発見された玄室の堅坑を検出するため、その東側にトレーナーを設定したところ、トレーナーの南端より別の堅坑が検出された。再び同氏と協議したところ、新たに発見されたところについては、玄室が隣の畑地の法面に食い込んでおり、造成を実施すれば法面が崩壊する恐れがあるため、現状のまま当面保存することとなり、堅坑及び閉塞状況のみ確認し、その後埋め戻した。

調査は、高原町教育委員会が主体となり、平成9年2月14日から3月7日までの延べ12日間実施した。

## 第2節 調査の組織

日守地下式横穴墓群の発掘調査の組織は、次の通りである（平成8年度）。

調査主体 高原町教育委員会

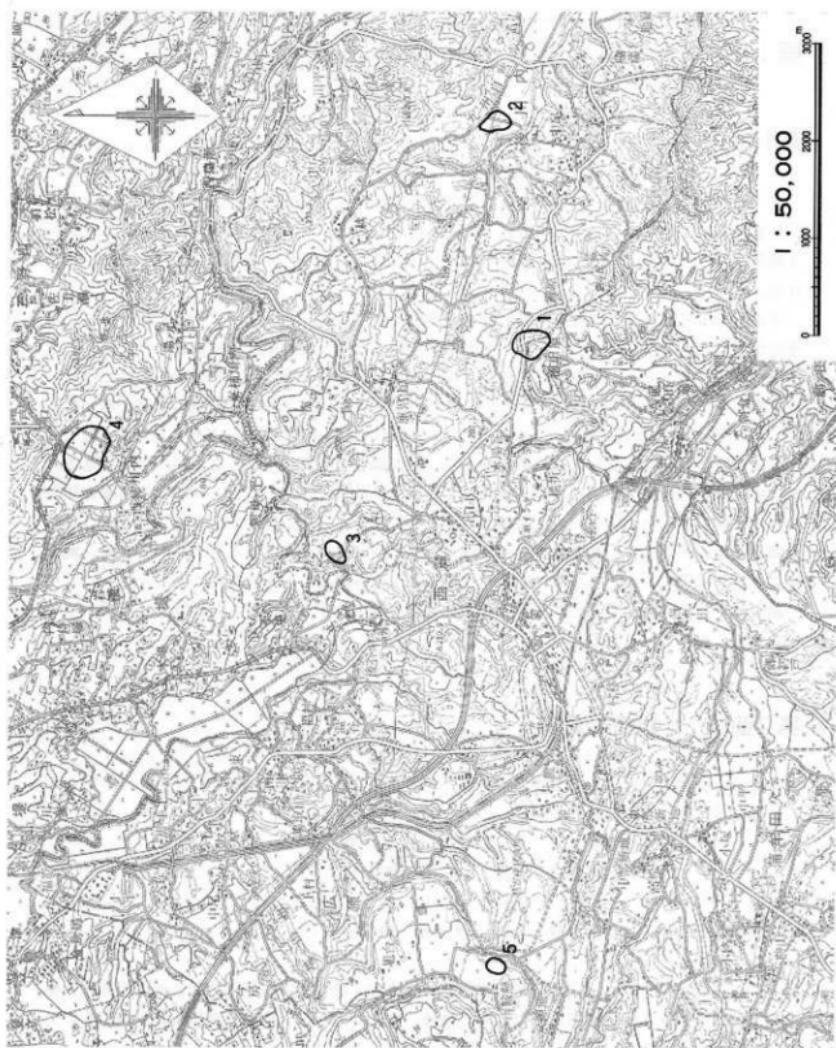
教育長 正入木 久男

社会教育課 課長 益本 忠男

係長 森山 博文

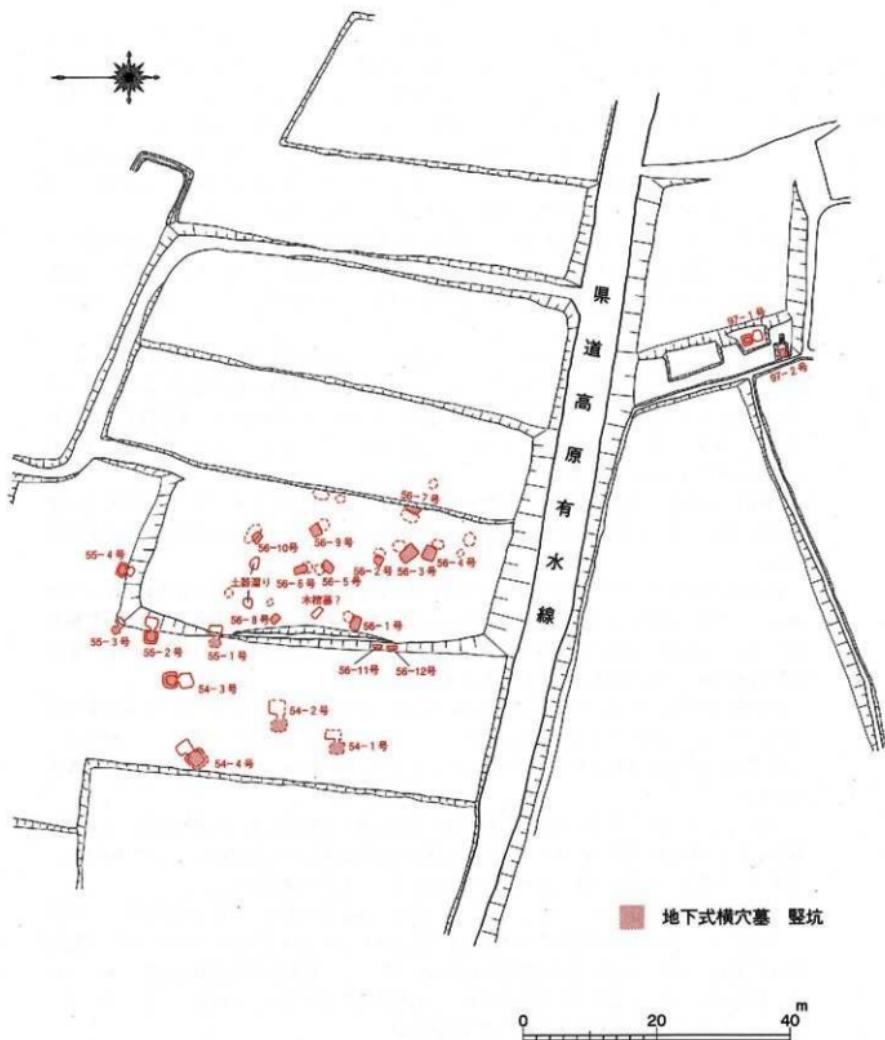
調査担当 社会教育課 主事 大學 康宏

又、この調査において、宮崎県総合博物館近藤協氏、県文化課石川悦雄氏、面高哲郎氏、県埋蔵文化財センター谷口武範氏をはじめ、役場、地元の方々に、様々な御指導、御協力をいただいた。



- 1. 日守地下式横穴墓群
- 2. 立切地下式横穴墓群
- 3. 湯ノ崎地下式横穴墓群
- 4. 大蒜地下式横穴墓群
- 5. 旭台地下式横穴墓群

第1図 遺跡位置図及び広域周辺地形図



第2図 日守地下式横穴墓群現状地形図

### 第3節 遺跡の歴史的環境及び調査状況

高原町をはじめ、西諸県地方では、地下式横穴墓が発見されることが非常に多い。高原町内だけでも、今回の日守古墳群を含めて計4箇所で確認されている。発見年代順でいえば、昭和47年12月に農作業中に1基発見された湯ノ崎地下式横穴墓、昭和51年12月に耕地整理作業中に13基発見された旭台地下式横穴墓群、昭和62年12月から昭和63年4月にかけて圃場整備中に次々と発見され、最終的に72基の地下式横穴墓と土壙2基、土器群2箇所が確認された立切地下式横穴墓群、などがある。このうち、まとまった量が検出された旭台・立切では、墓の配置による群の構造・構成を推察できる良好な資料となっている。

今回発見された地下式横穴墓のある宮崎県西諸県郡高原町大字後川内字日守は、町内から高崎町を抜けて北諸県郡高城町にいたる、県道高原・有水線の北側の丘陵を中心に位置し、道路を挟んだ南側の丘陵（北諸県郡高崎町大字前田字仮屋尾）とあわせて、日守・仮屋尾古墳群と認識されている。

明治年間に平部崎嶺によって著された『日向地誌』「諸縣郡高原郷」の後川内村の項目に、日守野についての記述がある。それによると、少量の追田・切換田の他は原野であったようである。地元の人の話によると、以前から古墳群中央の小さな谷を利用した、集落間をつなぐ道があり、周辺には人家もなく、かなり寂しい所だったようで、夜そこを通ると狐に化かされるといった類の言い伝えも残っている。

終戦後、高原町では比較的早くから耕地整理などの開発が行われたが、日守の道路もその開発の中に加えられ、早速拡張工事が行われた。その時に地下式横穴墓の玄室が開口したようである。

最初に発見されたのは、昭和44年の九州縦貫自動車道建設に伴う緊急分布調査のよってである。この時、道路の法面に6基開口しているのが認められ、早くから古墳群の存在が指摘されていた。ちなみに位置・詳細は不明だが、報告書の写真等を見る限り、軽石・自然石による羨門閉塞を施したものがあったようである。

その後、高崎町側では、昭和44・45年に、採土作業に伴って、3基の地下式横穴墓が発見されている。これが日守・仮屋尾古墳群における最初の調査例である。それから10年後、今度は高原町側から発見された。昭和54・55年に、採土作業に伴って4基ずつ、計8基発見された。

そのうち、54-1号墓からは、当時、地下式横穴墓では初見であった家屋構造で束柱の上部に斗を乗せた状態の浮き彫りが、54-3号墓からは床面を約10cm程掘ったシラスの屍床が、54-4号墓からは床面・体位中央・足下に朱痕が、それぞれ確認された。

その翌年行われた調査では、55-1号墓からは朱を施した頭蓋骨と貝輪が確認された。55-2号墓では、天井部分に造り出した棟木や、羨道から玄室にいたるまでのカシワバンの部分のみの塗朱、南壁の彩色線文等の装飾が成されていた。又、被葬者の右前腕に着裝された16個の貝輪をはじめ、鉄製品等の副葬品の量も、古墳群内で最もも多い。その他、55-3号墓・55-4号墓などの小型の地下式横穴墓も発見された。

引き続き昭和56年、宮崎県教育委員会により、これまで発見された8基の地下式横穴墓の東側の、古墳群の中で最も高所にある畠地を確認調査したところ、計10基の地下式横穴墓の堅坑と推定される遺構の他、木棺墓（？）1基、土器溜り2箇所が検出された。又、西側法面に堅坑の断面が2箇所確認された。

それから後は、今回の調査までは、発掘調査は行われていない。

又、発掘調査ではないが、平成9年8月27日より9月7日にかけて、文部省科学技術研究費補助金重点領域研究の遺跡探査事業が、天理大学文学部考古学研究室の置田雅昭教授を中心としたグループにより行われた。昭和56年度調査区を中心にレーダー・電気探査を実施したところ、調査区外などから計5箇所の異常応答が見られた。その探査結果を受けて、平成10年12月16日より23日にかけて確認調査を行った。前回の異常応答箇所のうち、詳細不明の応答箇所に対する試掘調査及び玄室内部の温湿度の測定、さらには狭道を開口してカメラを挿入し、デジタルカメラによる内部撮影及び合成写真作成等を実施した。又、同調査区の東隣の畠地に対して探査を行ったところ、新たに1箇所の異常応答が見られた。

現在のところ、天理大学による探査で発見されたものを除いて、31基の地下式横穴墓が確認されているが、地元の人の話によると、調査の機会なく破壊された地下式横穴墓もあるという話なので、正確な数は不明である。

## 第Ⅱ章 調査の結果

### 第1節 調査の概要

日守地下式横穴墓群の発掘調査は、平成9年2月14日から3月7日まで実施した。発掘調査は、造成中に陥没した1基（以下、97-1号墓）を対象としていたが、調査の結果、その南西側にさらに別の地下式横穴墓の豎坑（以下、97-2号墓）が確認された。これについては、豎坑の埋土と羨門の閉塞状況のみ確認した。97-1号墓は、羨門板閉塞平入両袖寄棟造で、被葬者は確認されなかった。副葬品は、蛇行剣・剣・刀子各1点、鉄鎌6点、鉗2点、計11点確認された。97-2号墓では、軽石による羨門閉塞が確認された。

### 第2節 調査の結果

#### 1. 97-1号墓（第3～4図）

##### 遺構（第3図）

この地下式横穴墓は、調教行く委員会に届け出の時点では、玄室の天井中央部が造成の際に崩落しており、それを塞ぐように板を並べ、遺構を保護するような形で上から土がかけられていた。

しかし、天井のアカホヤ部分が崩落したり、左壁の棚状施設もアカホヤ部分からが倒壊しているなど、損傷は激しかった。

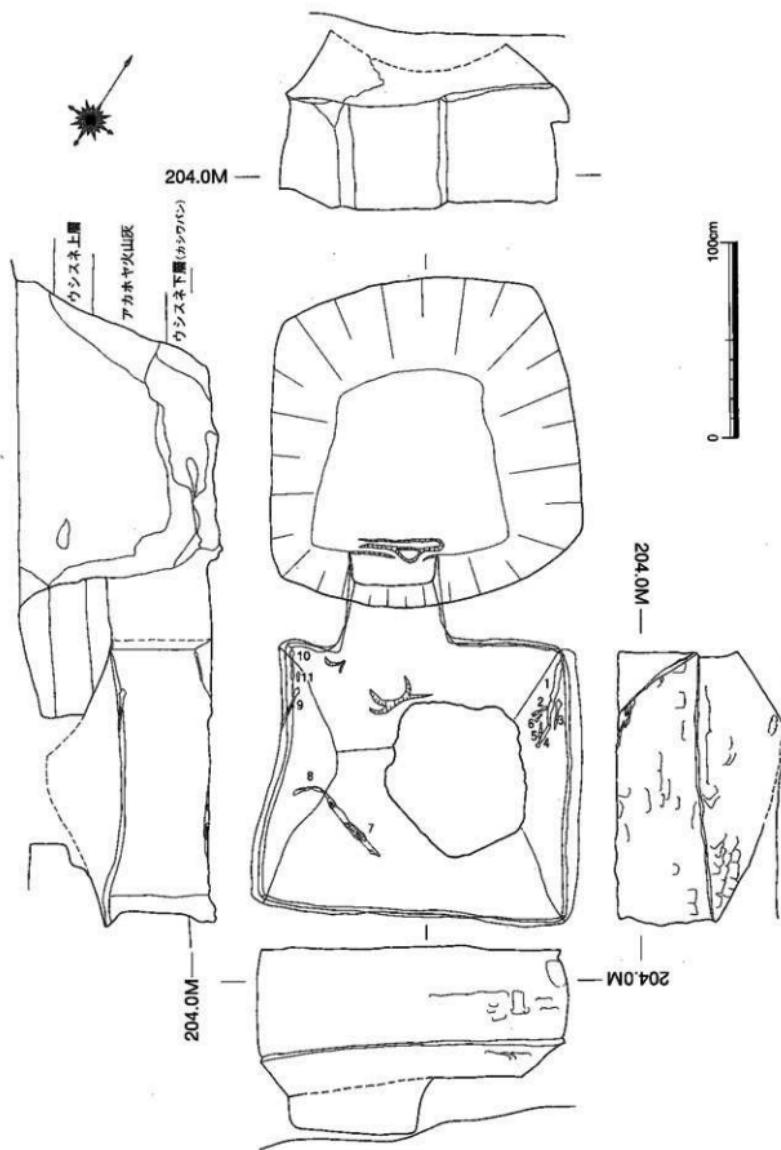
豎坑・玄室共に大部分をアカホヤ火山灰の中に造り込み、床面から高さ約10cmの辺りまでがカシワバンである。構造は、羨門板閉塞の平入両袖寄棟造りで、中心軸の方位は、N 32°Wである。

豎坑は、上面が造成により削り取られたのみで、ほぼ原形を保っていた。残っている時点では深さ99～104cmで、足掛け状の施設は見当たらなかった。

長軸は、残っている上面部分で、131～168cm、短軸は129～159cm、形は玄室側が少し広くなった台形状である。又、底の方では、長軸が94cm、短軸が73～102cmで、羨門の対面側の傾斜を比較的緩くしている。

羨門は、豎坑埋土の状況から板で閉塞されたものと思われる。羨道には既に羨門付近と同質の土が流れ込んでいた。羨道の床面は豎坑より5cm程上がっており、豎坑と羨道の境には、羨道と同じ幅の、豎坑床面より深さ2cm、羨道より深さ7cmの繰り込みがあり、ここに板を差し込んで閉塞したものと思われる。羨道は、高さが入口部分で52cm、玄室部分で52.5cm、幅は入口で46cm、玄室で56cm、長さは39cmである。なお、玄室側は、天井屋根部分の重みで、中心に亀裂が入り、崩れそうになっていた。

玄室は、天井の崩落・豎坑埋土・遺構埋土などで保存状態はかなり悪かった。平面プランは、主軸方位で136cm、幅が前壁で143cm、奥壁で156cmの台形状で、高さが床面から天井の棟木部分までが84cmである。



第3図 97-1号地下式横穴墓遺構実測図

床面は小さな凸凹が多く、丁度中心部分から奥が一段高くなっている。袖部も、一応は両袖だが、左袖部は小さく、又、床面は隅の方へ行くにつれて高くなつており、整形も不完全なままである。右袖と較べると、かなり雑な造りである。

四方に棚状施設を有するが、前・奥壁は幅2~3cmと狭く、又、斜めに面取りされているので、棚というよりは庇をイメージしたような形である。床面からの高さは奥壁で4.5~5.5cm、前壁で5.2.5~6.1cmである。左壁のものは奥壁側から前壁に向かって湾曲しており、床面と平行になつてない。高さは、奥壁の方で5.1cm、前壁の方で4.3cm、幅は6cmである。右壁が最も丁寧に造り込まれているが、奥壁側が緩やかに高くなっている。高さは4.1.5~5.1cmである。

屋根部分は寄棟造りだが、前壁のみ右上がりとなつてゐる。右側棚状施設から2.0cmの高さの所までアーチを約90度組み、その先端と隅降棟がつながつてゐるためである。

玄室築造の調整痕は、壁面全体に残つてゐるが、特に天井部では深く残存している。下から上へ削るものが多く、調整工具は隅丸方頭で幅5~7.5cm、不明瞭なもので幅10cmのものがある。棚状施設は丁寧に工作しているのに較べ天井は彫り込みによる段差ができてゐるほど調整が荒い。ただ、天井の稜線ははっきりと出している。

被葬者は不明、副葬品では、鉄製品が合計11点確認された。

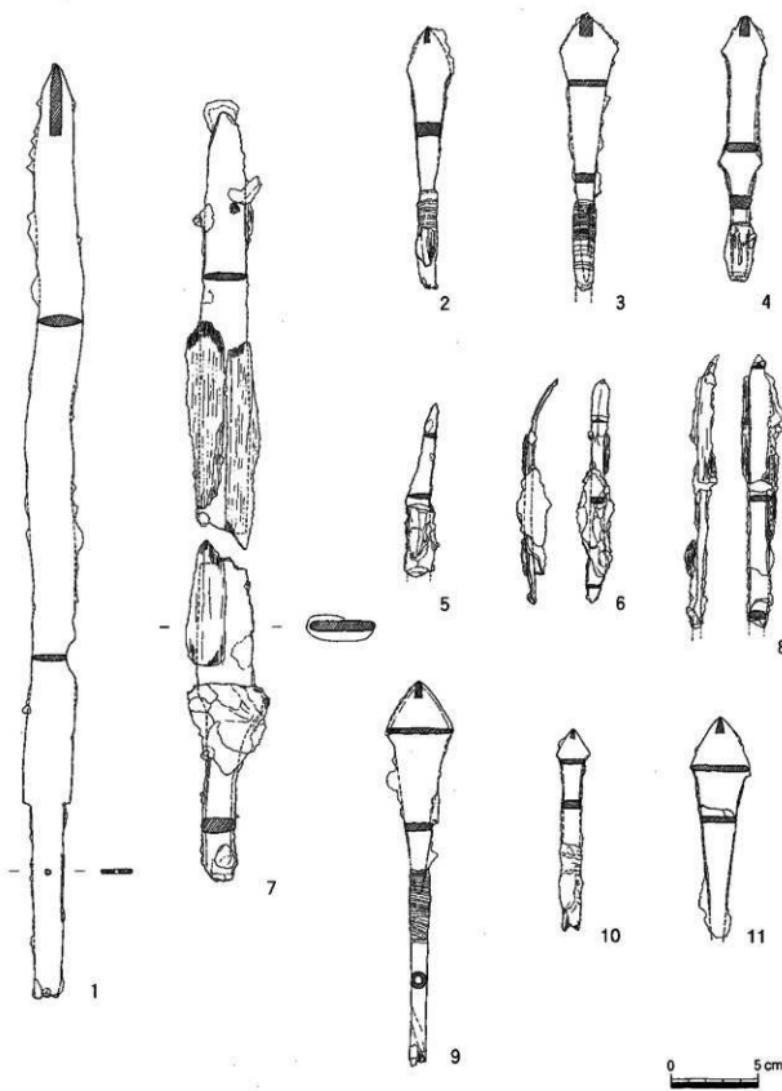
#### 遺物（第4図）

玄室の副葬品は、蛇行剣1点、剣1点、刀子1点、鎧2点、鉄鎌6点、計11点確認された。発見箇所は大きく3つのグループに分かれる。第1のグループは、前壁右隅に集中してゐる。蛇行剣の切先を下に向けて隅に立て掛け、その下にそれぞれ先端を隅に向かた状態であった。内訳は、蛇行剣1点（1）、刀子1点（5）、鎧1点（6）、鉄鎌3点（2・3・4）である。第2のグループは、中心よりやや奥側の床面である。天井及び左壁棚状施設の崩落による破損が著しかった。内訳は剣1点（7）、鎧1点（8）である。第3のグループは、左壁棚状施設上及びその下側である。遺物の出土状況から見て、棚状施設に置かれていたものが棚状施設の崩落によって落下したものと思われる。内訳は鉄鎌3点（9・10・11）である。

蛇行剣（1）は、玄室北東部隅に切先を下にして立て掛けられていた。発見当初、刃部中程から切先にかけて、天井のアカホヤ火山灰が積もつてゐたため、錆化が著しい。

全長（残存長）は54.2cm、刃部は2度屈曲しており、長さは42.9cmである。かなり細身で、剣というよりは槍をイメージするような細さである。切先にはフクラが見られず、稜線が左右非対称の二等辺三角形状になっている。断面形状は薄いレンズ状で、鎬は見られない。刃幅と刃厚は、それぞれ刃元で2.85cmと0.35cm、刃部中程で2.6cmと0.65cm、刃先で1.95cmと0.6cmである。片側に間から7.5cmの所に幅2.1cmの練り込みが見られる。闊は両闊で、直角に切り込んでいる。幅は左右共に0.4cmである。茎部は、端部が少し欠落したような形の穴が穿つてゐる。残存長11.3cm、幅1.7cm、厚0.23cmである。目釘穴は闊部から4.0cmの所に1つあり、口径は0.35cmである。もう1つ端部に目釘穴らしきものが見られ、実際は茎部はもう少し長かったものと思われる。刃部及び茎部に一部木質の痕跡が見られる。重量は23.2gである。

鉄鎌（2）は、玄室北東隅の蛇行剣の下に、鋒を北東隅に向けた状態で発見された。蛇行剣と同じく、天井のアカホヤ火山灰が積もつた状態だったので、錆化が著しいものの、鎌身は完



第4図 97-1号地下式横穴墓出土遺物実測図

全に残り、矢柄の一部分も残存している。圭頭斧箭鐵で、断面は両平造りである。鉄鐵身は錆化が著しく、残存厚で0.7cmだが、実際はもう少し薄いと推測される。

矢柄は、表皮・内部組織とともに明瞭に残っている。ただ、乾燥のためか、数箇所、縦にひび割れている。茎部には3~4条程の少し盛り上がった樹皮巻状の痕跡があり、幅は大きなものでは5.5~6cm、その間にまた無数の細かい痕跡が確認できる。鐵身の残存長は、外に出ている部分で9.5cm、茎部を含めると14cm前後になると思われる。矢柄の口径は、外径0.9cm、内径0.6cmである。重量は、錆のため重くなつておらず、32gである。

鉄鎌（3）は、玄室北東隅で、鋒を北東隅に向け、右壁棚状施設に沿つた状態で発見された。同じく天井のアカホヤ火山灰が積もつた状態だったので、錆化が著しいものの、鐵身と矢柄の一部が残存している。圭頭斧箭鐵で、断面は両平造りである。刃部は、比較的錆が薄く、身厚は0.3cmだが、鋒・脣部は錆が分厚く、身厚は0.5~0.7cmである。茎部は、矢柄の中に完全に残つておらず、鐵身部分で10.7cm、茎部を合わせると、推定で15.3cmである。矢柄は樹皮巻の痕跡が明瞭で、先の部分は幅0.1cmの細かい筋が、中程から幅0.2~0.25cmのやや太い筋が見られる。矢柄の口径は、外径が0.9cm、内径は0.4~0.5cmである。重量は45gである。

鉄鎌（4）は、玄室北東隅で、鋒を玄室中央に向けた状態で発見された。同じく天井のアカホヤ火山灰が積もつた状態で発見されたが、一部を除き、保存状態は比較的良好く、鐵身と矢柄の一部が残存している。圭頭斧箭鐵で、断面は両平造りであるが、の突起より6.4cm下方にもう一組同じような突起が見られる。逆刺が折れてなくなつたような形跡はない。身幅は、上の突起が2.6cm、下は2.4cmである。刃部は比較的錆が薄く、身厚は0.5cmである。矢柄は、乾燥のためか縦にかなりひび割れた状態であった。途中、中程で異様に膨らみ、最大径は1.55cm、破損端部は、外径0.9cm、内径0.55cmである。重量は45gである。

刀子（5）は、玄室北東隅の蛇行剣の下で、鋒を隅に向いた状態で発見された。同じく天井のアカホヤ火山灰が積もつた状態で発見されたが、保存状態は比較的良好く、刃部及び柄の一部が残存している。残存長は10.1cmで、そのうち、刃部は長さ5.8cm、刃幅及び刃厚はそれぞれ刃元で1.4cmと0.3cm、刃先は少し錆が厚くなつて0.7cmと0.32cmである。関は片關で、関から柄部になっている。茎部の状態は不明である。柄部の長さは4.3cm、ほぼ円形で外径は1.4cmである。材質は鹿角製と思われる。重量は11gである。

鉈（6）は、玄室北東隅の蛇行剣の下で、鋒を北東隅に向いた状態で発見された。同じく天井のアカホヤ火山灰が積もつた状態で発見されたが、保存状態は比較的良好く、身部及び柄の一部が残存していた。全長13.0cmで、そのうち、刃部は長さ2.8cm、刃幅0.95cm、刃厚0.2cm、反りの内側に三叉鎬がうっすらと確認できるが、右側がはっきりとしているのに対し、左側は曖昧である。裏側は、わずかではあるが匙状になつていている。茎部は長さ10.2cm、中央部分は壠部と違つて断面が長方形を呈しておらず、幅0.7cm、厚0.3cmである。茎端部は刃部の反りのない状態と同じ形に作られており、最大幅1.1cm、厚0.15cmである。鋒より3.2cmの所から7.8cmまでの間で断続的に木質の付着しているのが認められる。又、鋒より5.2cmの所から11.5cmの所まで鹿角製と思われる柄が装着されている。最初に木質を装着した後に鹿角製柄を装着したような形である。併し、木質を確認できるのは鹿角製柄の欠損した所なので、断定はできない。末端は欠損し、脣部の崩壊も著しい。柄部の最大径は2.1cmである。重量は14gである。

剣（7）は、玄室床面で発見された。天井等の崩落により、2つに折れた状態で発見された。整理作業の過程で接合を試みたが、一部欠損しているようで、接合できなかつた。全体的に錆

化が著しいものの、破損部分を除いては、刀身・茎部及び木製鞘の一部が残っている。ただ、錆のためや分厚くなってしまっており、特に関節部分は錆汁により原形が確認できない。全長は、推定で43.1cm、刃部は推定で31.6cm、中程から刃元にかけて鞘の一部が残っている。鞘は木製で完全に刀身を覆っておらず、丁度刀身の中心線の辺りで丸く分かれている。刀身は両丸造で、切先にはフクラが見られず、断面形状は薄いレンズ状で、鎌は見られない。刀身を見る限り、(1)の蛇行剣と同じような造りである。刃幅及び刃厚は、それぞれ刃先で2.6cmと0.4cm、刃元で3.9cmと0.6cmである。関節についてはX線を使用しても形状の把握は困難であった。鹿角製と思われる刀装具が錆汁により異様に変形しているためである。柄部は刀装具上端より長さ11.5cm、錆化が著しい。幅及び厚は1.7cmと0.9cmである。重量は、刃部断片の方が149g、茎部断片の方が124gである。

鉈(8)は、玄室奥の床面で発見された。左壁棚状施設の落下により、3つに折れた状態であった。鋒端部及び柄の一部が欠損している。木製鞘に納められていたものと思われ、全体的に鞘と同化しており、詳細が殆ど不明である。残存長は15.3cm、刃部は非常に短い。刃厚は0.3cmで、断面が三角形をなしている。茎部は幅1.2cm、身厚は0.3cmである。茎端部に行くにしたがって分厚くなってしまっており、破損部近くでの身厚は0.4cmである。重量は30gである。

鉄鎧(9)は、玄室左壁の棚状施設に引っかかった状態で発見された。発見当初に取り上げられ、又元の場所に戻したという経緯から、当時は棚状施設に置かれていたものと推測される。主頭斧箭鎧で、断面は両平造りである。錆化が著しいものの厚さにさほどの変化は見られず、身厚は頭部で0.32cm、鎧身で0.45cmである。茎は短く、2cm程度と推測される。矢柄は1.2cm残り、樹皮巻も明瞭に残っている。茎部分は横巻きで、幅は0.1~0.15cmである。それが4.5cm程続き、最後に端部を折り込んだような形跡がある。又、その下にはうっすらと左上がりに巻いた形跡がある。茎の口径は外径0.9cm、内径0.7cmである。重量は48gである。

鉄鎧(10)は、玄室左壁の下で発見された。壁と平行の状態で発見されたことから、当初は左壁棚状施設に置かれていたものと思われる。主頭斧箭鎧で、断面は両平造りだが、他のものに較べてかなり細身で、頭部も小振りである。鎧身の幅と身厚は、1.05cmと0.35cm、頭部の幅と身厚は1.9cmと0.2cmである。断面は、頭部に行くに従って薄くなっている。矢柄は鎧茎部を含め一部残存している。口径は0.9cm、うっすらと茎部に樹皮巻の痕跡がある。重量は11gである。

鉄鎧(11)は、玄室左側床面で、2つに折れた状態で発見された。玄室左壁棚状施設から落下したものと思われる。茎部が途中から亡くなっているが、全体的に残りは良い。主頭斧箭鎧で、断面は両平造りである。残存長は、12.9cm、身厚は0.35cm、重量は18gである。

## 2. 97-2号墓(第5図)

### 遺構(第5図)

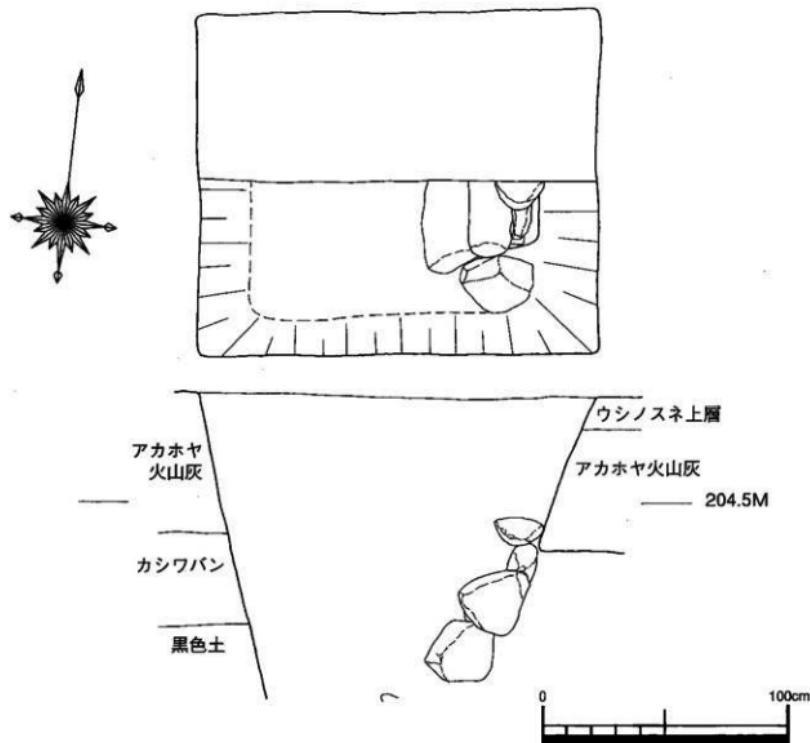
この地下式横穴墓は、97-1号墓の豊坑を確認するために、玄室南西側にトレッジを設定したところ、別の豊坑を発見した。これについては、造成地の南端にあり、造成すれば隣の法面が崩れる可能性があったため、現状のまま留め置くとして、豊坑とその埋土、閉塞状況のみ

この地下式横穴墓は、97-1号墓の豊坑を確認するために、玄室南西側にトレンチを設定したところ、別の豊坑を発見した。これについては、造成地の南端にあり、造成すれば隣の法面が崩れる可能性があったため、現状のまま留め置くとして、豊坑とその埋土、閉塞状況のみ確認した。

豊坑は、97-1号墓と同じく上面が攪乱されており、同じ土層で検出された。主軸方位はW7°S、長軸が160cm、短軸が180cmの方形である。豊坑埋土はほぼ一層に限られるが、掘削中、床面近くでかなり堅くしまっており、又、閉塞に使用されているものと同じ種類の輕石が埋土下面に露出していたことから、追葬の可能性がある。

羨門は輕石によって閉塞されていた。粘土等の目張りはなされておらず、ただ積んだだけというような状態であった。羨道との隙間も多い。

玄室については調査は行わず、埋め戻して現地保存とした。



第5図 97-2号地下式横穴墓造構実測図

## 第Ⅲ章　　まとめ

### 第1節　　遺構

今回発見された地下式横穴墓は、従来知られていた場所より、幾分はずれたところで発見された。玄室そのものの大きさについては、床面積など特に際立ったところはないが、天井がやや低めに作られている。ただ、今回のものは両袖で、片袖型式の多い日守古墳群の中でも、両袖の玄室を所有するのは、仮屋尾2号墓（昭和44年調査）と97-1号墓のみである。しかし、左袖は床面を平にしない中途半端な工作や凹凸の多い粗い床面など、全体的に雑な印象を受ける半面、右袖には丁寧にアーチ状彫刻を施すなど、左右で全く異なる印象を受ける玄室である。羨門閉塞法に関しては、97-1号墓は、埋土の状況から板閉塞と推定されたのに対し、97-2号墓は軽石閉塞であった。ただ、これも隙間の多い、非常に雑な積み方という印象を受けた。

### 第2節　　遺物

副葬品について、剣・鉄鎌・刀子等の基本構成パターンは、他の地下式横穴墓と変わりないが、基本構成パターンの中に入っている刀や、旭台・立切等の、他の地下式横穴墓群に見られる二段逆刺鉄鎌や大型圭頭鎌が無いのに対して、蛇行剣や（4）・（10）のようなこれまで出土することのなかった鉄鎌などの遺物が見られ、群内の地下式横穴墓とは一線を画するような感じである。特に蛇行剣については、これまで100基以上もの地下式横穴墓が確認されている高原町でも初見であった。

蛇行剣については、甲冑や二段逆刺鉄鎌と共に畿内と隼人との関係を示唆する遺物と考えられており、これまでに南九州で35件出土しているが、その殆どが地下式横穴墓から出土している。高原町の近辺では、えびの市島内地下式横穴墓群、野尻町大森地下式横穴墓群で確認されている。ただ、今のはかなり細身で、鎧も見られず、どちらかといえば槍のようなイメージを受ける。

（4）の異形鉄鎌については、同じ日守地下式横穴墓群の55-2号墓、都城市菴子野59-1号墓（1号鉄鎌）の2箇所で同型の鉄鎌が確認されている。特に、日守55-2号墓については、同じ群の中でもかなりの副葬品を有しているだけでなく、天井部の彩色線文、壁面への塗朱など玄室の装飾も際立っている上、熟年女性と推定される人骨の右前腕骨に着装された貝輪などの装飾品から見て、古墳群被葬者の中心に近い地位にいたものと思われる。ただ、上記の鉄鎌に関しては、頭部が圭頭というよりはフクラのついた柳葉に近い形態で、どちらかといえば菴子野59-1号墓のものに近い。いずれにせよ、このような形態を持った鉄鎌の出土例が少ないので奇妙である。

### 第3節　　結語

以上、この地下式横穴墓の年代を推定すると、まず、日守地下式横穴墓群の使用期間については、大体5世紀後半から6世紀初めという年代が与えられている。97-1号墓については、蛇行剣が出土していることや、大型の圭頭斧箭鎌・長頭鎌が見られないことから考えて、おおよ

よその目安としては、5世紀後半に築造されたものとして良いのではないか。しかし、異形鉄錐や、地下式横穴墓自体の造りから考へるならば、5世紀中葉にまで遡るもので、日守地下式横穴墓群の中でも、比較的初期の段階で築かれたものではないだろうか。

#### (参考文献一覧)

平部崎南	1884	『日向地誌』
宮崎県教育委員会	1966	『九州縦貫自動車道遺跡分布調査報告書』
宮崎県教育委員会	1970	『高崎町坂屋尾下式古墳調査報告』『宮崎県文化財調査報告書』 第15集
宮崎県教育委員会	1972	『高原町湯ノ崎地下式古墳調査報告書』『宮崎県文化財調査報告書』 第17集
宮崎県教育委員会	1977	『旭台地下式古墳群発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』 第19集
宮崎県教育委員会	1980	『日守地下式横穴54-1~4号発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』 第22集
宮崎県教育委員会	1981	『日守地下式横穴55-1~4号発掘調査』『宮崎県文化財調査報告書』 第23集
宮崎県教育委員会	1981	『日守地下式古墳群確認調査』『宮崎県文化財調査報告書』 第24集
都城市教育委員会	1986	『菫子野地下式横穴』『都城市文化財調査報告書』 第4集
高原町教育委員会	1991	『立切地下式横穴墓群』『高原町文化財調査報告書』 第1集
宮崎県	1993	『宮崎県史 資料編 考古2』
東憲章	1996	『地下式横穴墓の基礎的研究』『考古学雄渉・西野元先生退官記念論文集』
宮崎県	1997	『宮崎県史 通史編 原始古代1』

尚、並行剝の資料等については宮崎県埋蔵文化財センターの東憲章氏から、鉄錐の年代観については、同センターの和田理啓氏、異形鉄錐については、同センターの高橋誠氏、都城市的異形鉄錐については、都城市教育委員会文化課の矢部喜多夫氏にご教示をいただいた。この場を借りて感謝いたします。

又、黒田雅昭氏に玉稿をいただいたが、印刷の都合上、校正を受けることができなかった。一部、氏の意図するところと異なる箇所があると思うが、その点はご容赦願いたい。

第1表 川除遺跡出土鐵器計測表

(単位 cm)

遺物番号	名 称	全長 (残存長)	刃部長	茎部長	刃部幅	刃部厚	重 量	備 考
1	蛇行劍	54.2	42.9	11.3	1.95 ~2.85	0.35 ~0.65	232 g	刃部に縫り込み
5	刀 子	10.1	5.8	4.3	0.3 ~1.4	0.3 ~0.32	11 g	柄鹿角製?
7	劍	43.1	31.6	11.5	2.6 ~3.9	0.4 ~0.6	273 g	刀装具鹿角製?

(単位 cm)

遺物番号	名 称	全長 (残存長)	鍔身部長	鍔身部幅	鍔身部厚	矢柄部長	重 量	備 考
2	圭頭斧箭鉄鎌	15.1	9.5 ~14.0	0.9 ~2.6	0.7	5.7	32 g	
3	圭頭斧箭鉄鎌	16.2	10.7 ~15.3	0.95 ~3.4	0.3 ~0.7	5.3	45 g	
4	圭頭斧箭鉄鎌	15.4	12.1 ~15.2	1.75 ~2.7	0.5 ~0.75	3.4	45 g	
9	圭頭斧箭鎌	22.5	11.0 ~12.4	0.9 ~3.9	0.32 ~0.45	11.2	48 g	
10	圭頭斧箭鎌	11.8	6.8	1.05 ~1.9	0.2 ~0.35	5.0	11 g	
11	圭頭斧箭鎌	12.9	-	0.7 ~3.55	0.35	-	18 g	

(単位 cm)

遺物番号	名 称	全長 (残存長)	刃部長	茎部長	鍔身部幅	鍔身部厚	重 量	備 考
6	鍔	13.0	2.8	10.2	0.7 ~0.95	0.2 ~0.3	14 g	柄部鹿角製?
8	鍔	15.3	0.8	14.5	0.85 ~1.2	0.3 ~0.4	30 g	



## 宮崎県高原町日守地下（立坑）式横穴墓群のレーダ探査・補遺

この報告は、平成10年9月に行われた第1回日本文化財探査学会において発表された内容及びその補足である。

文中で使用される用語等は、地名の訂正を除いては、原文のまま使用している。



## 宮崎県高原町日守地下（立坑）式横穴墓群のレーダ探査・補遺

○置田雅昭・桑原久男 天理大学文学部

Walter Edwards 天理大学国際文化学部

西村 康 奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター

Dean Goodman マイアミ大学地球物理学応用考古学探査研究所中島町研究室

日守地下式横穴墓群は宮崎県西諸県郡高原町大字後川内にあって、隣接する高崎町にまたがって位置している。遺跡は標高200m前後の、緩やかに北に傾斜する、台地上に営まれている。1967年の分布調査で、道路の切り通しで3基の地下式横穴墓が確認された。1979・80年には畑の地下げ工事で、8基の地下式横穴墓が発見され、発掘調査されている。その平均的な大きさは、立坑の平面が $1.7 \times 1.4\text{m}$ の長方形で、地表下1.7mまで掘り、横穴を掘って墓室とする。立坑から墓室に至る通道は幅、高さとも0.5m前後あって、墓室の平面の大きさは $1.7 \times 1.2\text{m}$ 、高さ1m前後である。天井は寄せ棟の形状をなし、壁との境に櫛を作る。墓室には数枚の遺骸を埋葬し、羨道入口を複数の石材で閉鎖する。立坑はある程度の深さまで土で埋め戻したものらしい。現状では地上に何の標識も残さないため、遺構を確認することが不可能である。地下式横穴墓と地層との関係は墓室天井がアカホヤ火山灰層の中にある。これは築造者がアカホヤ火山灰が固く、墓室の空洞を保つのに適していたことを熟知していた結果と思われる。

探査は1981年に宮崎県教育委員会が約300m<sup>2</sup>を発掘し、10基の地下式横穴墓を確認した地域（第1調査区）と東に20m離れた畑（第2調査区）で行った。探査目的はすでに明らかにされている立坑の墓室を明らかにすること、および、発掘調査の範囲外にも地下式横穴墓がないか、また、その分布範囲がどこまでおよぶかを確かめることであった。

調査は1997年夏期に実施した。まず地形測量を行い、レーダ・電気探査と地中温度の測定を行ったが、ここでは主として、レーダ探査の結果を報告する。レーダ探査はジオレーダ1機（図1）とサー2機の2種の機械を用い、300と700メガヘルツの2種のアンテナで、同じ地域を都合3回探査した。第1調査区の探査範囲は南北の最大長が57m、東西の最大幅が21mで、面積にして約700m<sup>2</sup>である。ジオレーダ1機は1mで、サー2機では0.5m間隔で探査し、平面図化した。この方法は遺構の位置とは無関係に、あらかじめ設定した測線に沿って探査したものであるが、これによって遺構の位置を推定して後に、立坑と墓室に直交するように測線を設け、0.5m、あるいは0.25m間隔で探査し、細部を明らかにするようにした。第2調査区ではサー2機、700メガヘルツのアンテナを用い、1m間隔で、1,350m<sup>2</sup>を探査した。

結果的に第1調査区では、13箇所で空洞の墓室あるいは天井の落下した墓室と推定される異常応答をうらえることができた。なお、そのうち9箇所は発掘で確認されている立坑と対応するが、8号立坑の周辺には明確な異常応答も見いだすことができなかつた。すなわち、残る4箇所（これをX1・X2・X3・X4と呼ぶ）が新たに地下式横穴と推定されるものである。また、2号立坑は1mあるいは0.5m間隔で規則的に探査を行っても墓室の位置が不明分であったが、立坑と直交するように測線を設定し、0.25m間隔で探査したところ、立坑と推定される異常応答がみられ、その南東の狭い範囲に異常応答がみられた。そのほか、例えば、3号立坑に対応する空洞と推定される応答の南西（立坑寄り）に強い異常応答（図2）があり、反対の北東側にはこうした応答がみられなかつた。また、7号立坑と墓室を縦断する探査では深さの異なる2つのこぶ状の特徴的な波形（図3）がみられた。6号立坑に対応する異常応答は、その一部が空洞を示す波形とは異なる。

第1地調査区全般の所見としては、墓室と推定されるものは明瞭に現れ、その波形によって、空洞、天井の落下した空洞を判断できた。立坑については、それと判断できる応答のある場合と、立坑のあるべき位置になら異常波形をみることのできない場合があった。

第2調査区の探査は、サー2機での、1回限りの探査であり、十分なものではないが、地下式横穴の墓室を推測させるような明確な異常応答は1箇所にすぎない。

こうした探査の結果に対して、考古学的には次のように判断される。8号立坑に対応する墓室の応答が認められないのは、これが地下式横穴の立坑ではないのではないかと言う推定である。発掘された立坑の平面形がいびつであり、他の立坑の形と異なるものと推定の根拠である。なお、より細かくみると、8号立坑の北東0.5mに小さな異常応答が認められる。これが墓室の応答の可能性があるが、南西6mにも同様の小さな異常応答があり、南西のそれは立坑とは関係のない場所であるので、

北東のそれも墓室とは判断しなかった。2号立坑は波形の違いにより識別することができたが、1981年の発掘調査時の写真では羨道の上部まで発掘している。従って、ここで立坑が明瞭に識別できたのは、この発掘結果をとらえたものであろう。3号立坑と推定空洞の間にみられる強い応答は羨道の石蓋をとらえているのではないかと推定される。7号立坑に対応する2つのこぶ状の応答は、深い方が羨道の応答、浅い方が墓室の応答であり、羨道には石蓋があるとの推測が可能である。6号立坑に対する応答は落下した墓室を推測させるものであるが、発掘時の記録にはそうした記述がない。仮にこの推測に誤りがないとすれば、1981年以降に何らかの理由で天井の一部が落下したとせざるを得ない。

第2調査区の探査範囲外の北東数mで、地下式横穴墓が検出されたとの報告もあるが、遺構の分布が極めて希薄であるとせざるを得ない。この点、第1調査区との間の探査の空白地帯を調査することにより、遺跡全体の様子を明確にすことができる。

以上の、探査と考古学的推定から、さらに、地下式横穴墓の分布について、ある推測を加えることが可能になった。すなわち、立坑と墓室の方向が一見無秩序に分布するよう見えるが、1・5・6号立坑、9号立坑とX1・X2、2・3・7号立坑、4号立坑とX3の4群はほぼ円周に沿って立坑が位置し、中心の方向に墓室が認められることになる。最大12m、最小6mの墳丘を復元することができよう(図4)。発掘をしないで、構築されていたであろう墳丘の復元を可能にしたのは、初めてのことである。

また、3機種のレーダーを用いた実験では、ジオレーダー1機では大きな分布しかとらえることができないが、300メガヘルツのスライス平面図(図5右)では、墓室を円形あるいは楕円形に表示することができた。さらに、700メガヘルツのスライス平面図(図5左)は墓室を方形にとらえる事が明らかになった。当然の事ながら、目的に応じて探査機種を選定する必要がある。引き続き日守地下式横穴墓群を探査するとともに、その一部を発掘して、石蓋とした推定が正しいものかどうかを検証する予定である。

### 補 遣

以上は1998年9月に行われた第1回日本文化財探査学会発表要旨に、発表に用いた図を加えたものである。本文の一部の用語を変更したが、論旨は変わっていない。

文中で「7号立坑に対応する2つのこぶ状の応答は、深い方は羨道の応答、浅い方が墓室の応答であり、羨道には石蓋があるとの推測が可能である。」とした全文を削除する。これは南北方向の探査ラインの情報から解釈したものであるが、立坑と墓室は東西方向に主軸を置くから、南北方向からは立坑と墓室の関係をとらえることはできない。単純な誤解から生じた誤りである。なお、この指摘は共同研究者のW.Edwardsによるものである。

Edwardsは7号墓の2つのこぶ状の応答を、とともに墓室と解釈し、深い方の応答が墓室の本来の天井をとらえたもので、浅い方の応答は落下した天井を捉えたものではないかと解釈した。置田も妥当な解釈と判断し、これに従う。

なお、1998年12月に本遺跡の第2次調査を実施した。調査内容はレーダー探査、電気探査、地中温度測定、3号立坑・8号墓立坑の発掘、7号墓室のボーリング調査である。この結果8号立坑は第1次調査の推定どおり墓室は認められなかず、地下式横穴墓でないことが判明した。3号立坑は推定どおりの位置に墓室を確認したが、石蓋は認められなかつた。また、7号墓室のボーリング調査ではアカホヤ火山灰層にあたらないまま、空洞に達したから、天井の一部の落下していることが確實視され、Edwardsの解釈が裏付けられた。なお、第1調査区と第2調査区の間を第3調査区とし、探査を行ったが、ここでは新たに地下式横穴墓と推定される1つの異常応答が認められた。

第2次調査の検討は別途行うが、発表要旨の再録にあたり、補遺として最新の調査結果を加えておく。(1998年12月27日 置田)

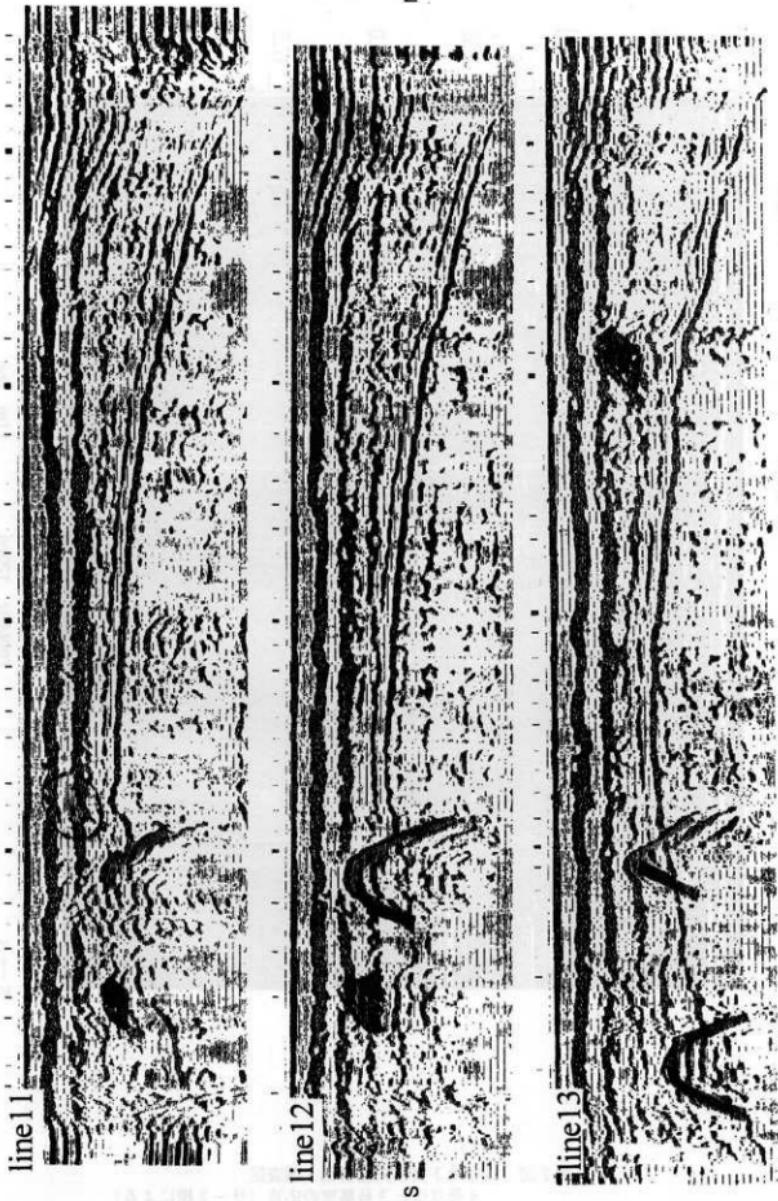
### 図解説

- 図1 日守地下式横穴墓群第1調査区 ジオレーダー1機による断面図 右が北
- 図2 日守地下式横穴墓群第1調査区 4号立坑と3号墓室の応答 サー2機
- 図3 日守地下式横穴墓群第1調査区 7号墓室の応答 サー2機
- 図4 日守地下式横穴墓群第1調査区 立坑(実線)・墓室(波線)と推定復元の墳丘  
方眼は5mメッシュ
- 図5 日守地下式横穴墓群第1調査区 300・700メガヘルツのスライス平面図

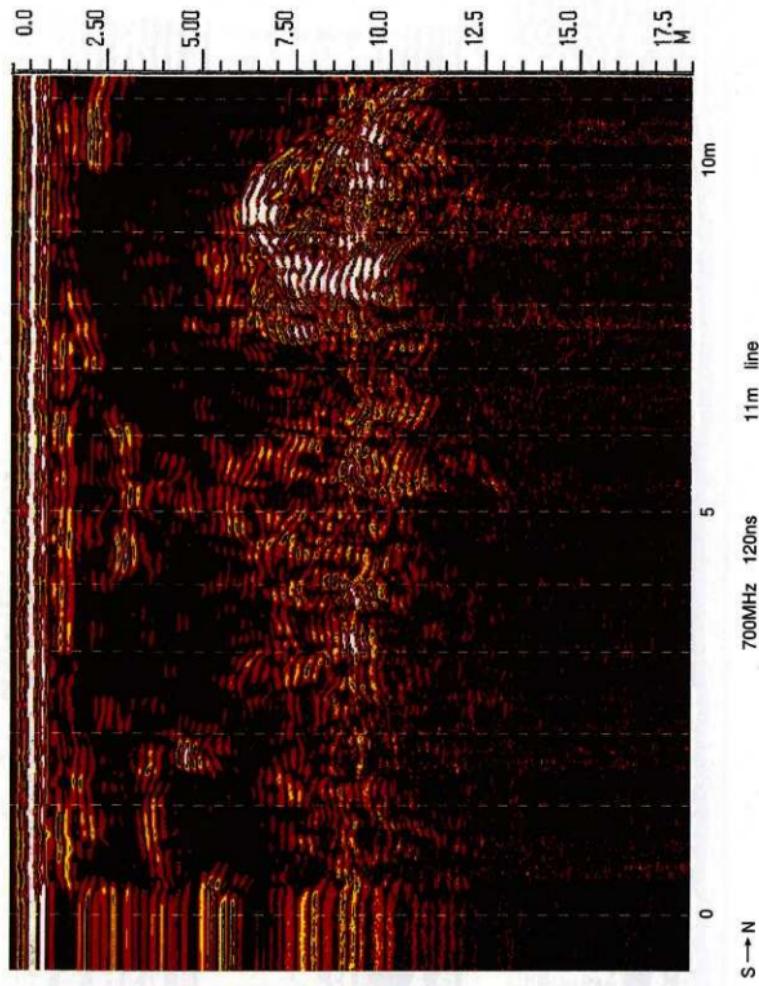
# 図 版



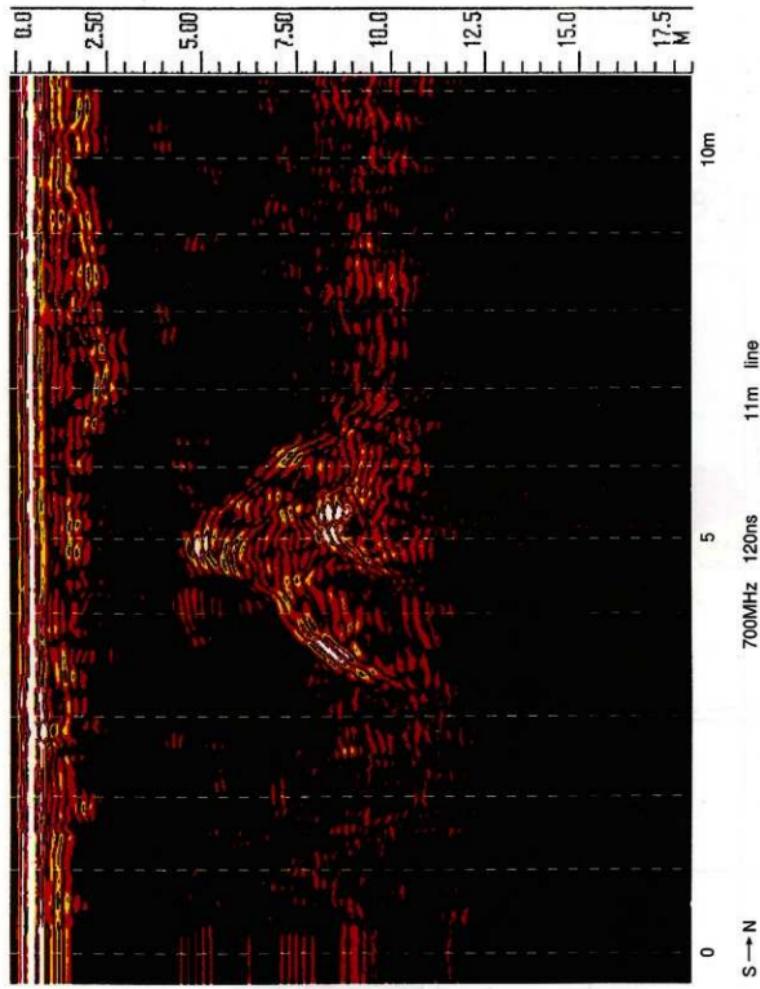
第1図 日守地下式横穴墓群第1調査区 ジオレーダによる断面図



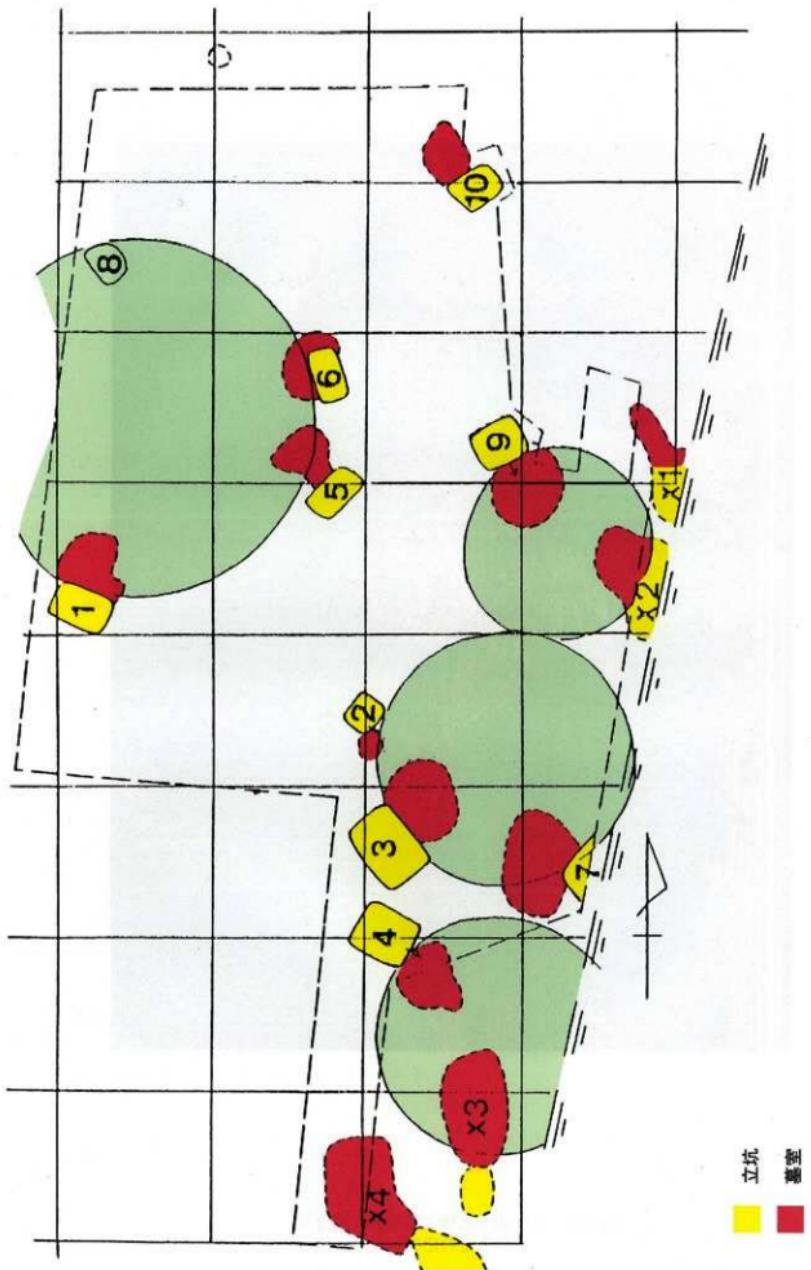
3号墓室  
4号立坑



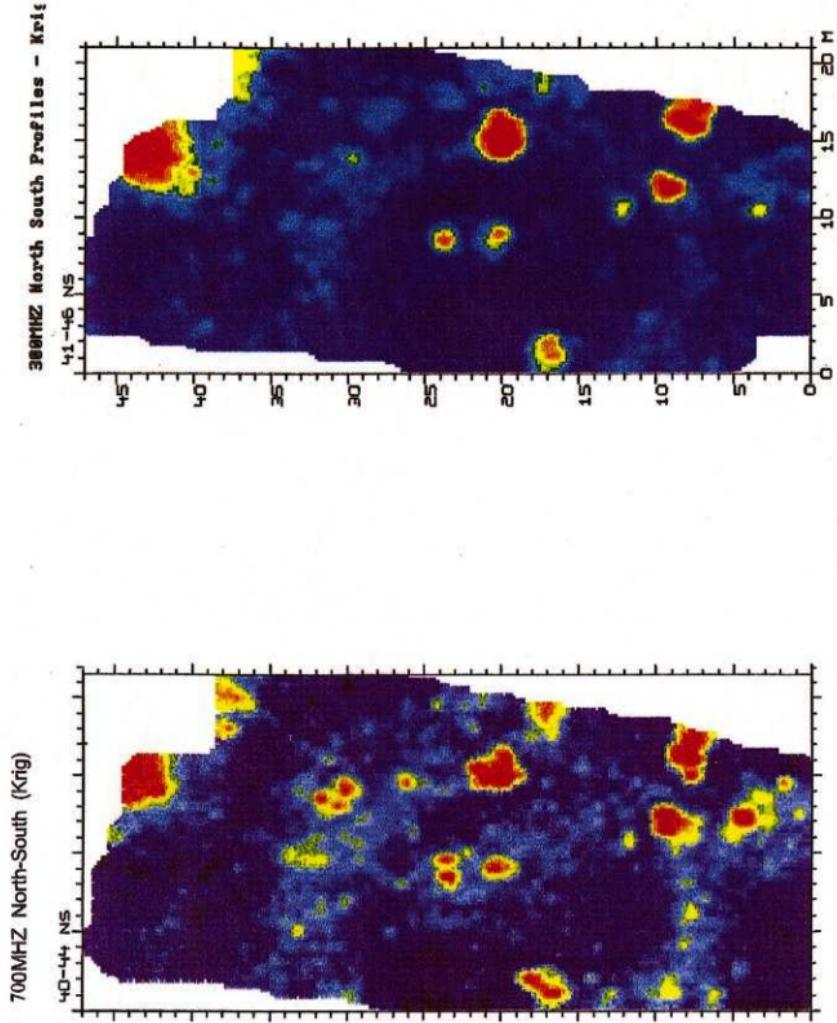
第2図 日守地下式横穴墓群第1調査区  
4号立坑と3号墓室の応答（サー2機による）



第3図 日守地下式横穴墓群第1調査区  
7号墓室の応答（サー2機による）



第4図 日守地下式横穴墓群  
立坑・墓室と推定復元の埴丘（方眼は5m×5mシユ）



第5図 日守地下式横穴墓群  
300・700メガヘルツのスライス平面図



図 版



調査前の状況

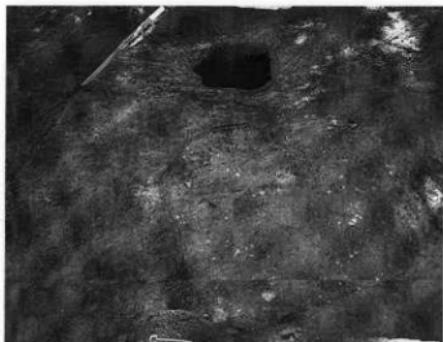


調査前の状況  
(97-1号墓)



97-1号墓竪坑検出(1)





97—1号墓竖坑挖出（2）



97—1号墓竖坑  
土层断面状况



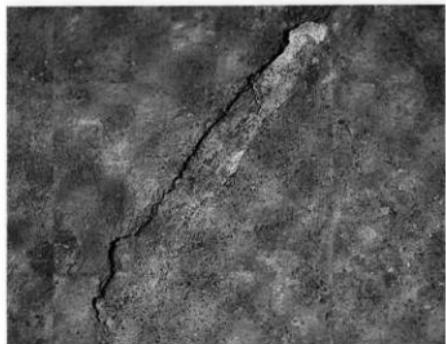
97—1号墓竖坑完掘状况

蛇行劍出土狀況



圖版  
3

劍出土狀況



鐵鎌出土狀況





97—2号墓竖坑  
検出状況（1）



97—2号墓竖坑  
検出状況（2）



97—2号墓羨門  
閉塞状況



97—1号墓 出土遗物



# 大谷遺跡表採縄文土器資料

## 例　　言

1. 本書は、高原町教育委員会が定期的に実施した、宮崎県西諸県郡高原町大字広原字大谷に所在する大谷遺跡より採集した土器の報告である。

2. 大谷遺跡では、縄文時代後期を中心に、弥生・古墳・古代の遺物がそれぞれ確認されているが、本報告では、大谷遺跡出土遺物の中で多数を占める縄文土器について、その一部を報告している。

なお、採集された土器については、横手浩二郎氏が『南九州縄文通信』第8号に寄稿した論文に記載されている所と同じ地点で採集されたものである。

3. 本報告に使用した図面及び写真については、大學が作成した。

4. 土器の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局ほか監修の、「新版 標準土色帳」に掲った。

4. 今回の土器の考察については、宮崎縄文土器研究会の方々に多大な御協力をいただいた。

5. 出土遺物については、全て高原町教育委員会で保管している。

## 本文目次

例 言	4 2
本文目次	4 3
挿図目次	4 3
表目次	4 3
図版目次	4 4
第Ⅰ章 はじめに	
第1節 遺跡の歴史的環境及び調査状況	4 5
第Ⅱ章 表採資料の検討	
第1節 遺物の考察	4 8
第Ⅲ章 まとめ	
	6 0

## 挿図目次

第1図 遺跡位置図及び広域周辺地形図	4 7
第2図 大谷遺跡表採土器実測図（1）	5 2
第3図 大谷遺跡表採土器実測図（2）	5 3
第4図 大谷遺跡表採土器実測図（3）	5 4
第5図 大谷遺跡表採土器実測図（4）	5 5
第6図 大谷遺跡表採土器実測図（5）	5 6
第7図 大谷遺跡表採土器実測図（6）	5 7
第8図 大谷遺跡表採土器実測図（7）	5 8
第9図 大谷遺跡表採土器実測図（8）	5 9

## 表目次

第1表 大谷遺跡表採土器観察表（1）	6 1
第2表 大谷遺跡表採土器観察表（2）	6 2
第3表 大谷遺跡表採土器観察表（3）	6 3
第4表 大谷遺跡表採土器観察表（4）	6 4
第5表 大谷遺跡表採土器観察表（5）	6 5
第6表 大谷遺跡表採土器観察表（6）	6 6
第7表 大谷遺跡表採土器観察表（7）	6 7

## 図 版 目 次

図 版 1	遺跡遠景	7 1
	平成 9 年度試掘調査風景 (1)	
	平成 9 年度試掘調査風景 (2)	
図 版 2	表採遺物 (1)	7 2
図 版 3	表採遺物 (2)	7 3
図 版 4	表採遺物 (3)	7 4
図 版 5	表採遺物 (4)	7 5
図 版 6	表採遺物 (5)	7 6
図 版 7	表採遺物 (6)	7 7
図 版 8	表採遺物 (7)	7 8

# 第1章 はじめに

## 第1節 遺跡の歴史的環境及び調査状況（第1図）

大谷遺跡は、宮崎県西諸県郡高原町大字広原字大谷に所在する遺跡である。宮崎県と鹿児島県との県境にある高千穂峰の東麓、町内の遺跡でも比較的高所の、標高約300～320mの台地の緩斜面に位置し、南北には字の由来を示している深い谷がある。日当たりも良く、水にも事欠かない所なので、人が住むには比較的条件の整った場所である。

大谷遺跡の周囲、特に北側には、同じような台地がいくつもあり、それぞれ水も豊富なので、その殆どに遺跡が集中している。谷を挟んだ北側の台地にある佐土遺跡では、西平式土器など縄文時代後期を中心に、縄文時代前期の曾畠式まで遡る土器がまとまって確認されている。さらにその北側の水源地遺跡では、約30年前、畑地造成の際に多量の弥生土器の完形品が出土したという話である。又、東側の、現在宮崎県畜産試験場がある大鹿倉遺跡では、広範囲での土器の散布が確認される他、落とし穴等の遺構も確認されている。その他、柳野遺跡・鷹巣谷遺跡・鷹巣原遺跡群・立脇遺跡・今房遺跡群などの大規模な遺跡が、これまでの表探査によって確認されている。

このように、大谷遺跡を含めた周囲の環境は、人が住むには好条件の整った地域であった。ただ、当時活発な噴火活動を行っていた高千穂峰をはじめとする霧島連山が背後に控えているため、町内外の他地域よりも火山の被害に遭う確率が非常に高かった。そのせいか、遺跡の年代が連続することはあまりなく、断続していることの方がむしろ多い。大谷遺跡もその例にもれず、土器の出土量から見れば、縄文時代後期土器の莫大な量に対して、それ以降の土器の量は、極端に少なくなってしまっており、古代の土師器等が出土することはあまりない。又、平成10年3月に実施した試掘調査の際には、古代に相当する火山灰層に乱れがあり、以前の調査からも鑑みて、畠として使用されたものと思われる。しかし、発掘調査が1度しか行われていないため、遺跡の詳細は不明である。

発掘調査については、広域農道建設に伴って、宮崎県教育委員会により、平成7年6月から8月にかけて行われたが、その時、赤色火山灰下から畠の畠と思われる溝、時期不明の竪穴住居などの遺構の他、縄文時代後期土器、石器、土師器、鉄器などが出土した。この時出土した縄文時代後期の土器については、包含層から出土し、遺構は伴っていないかったということである。

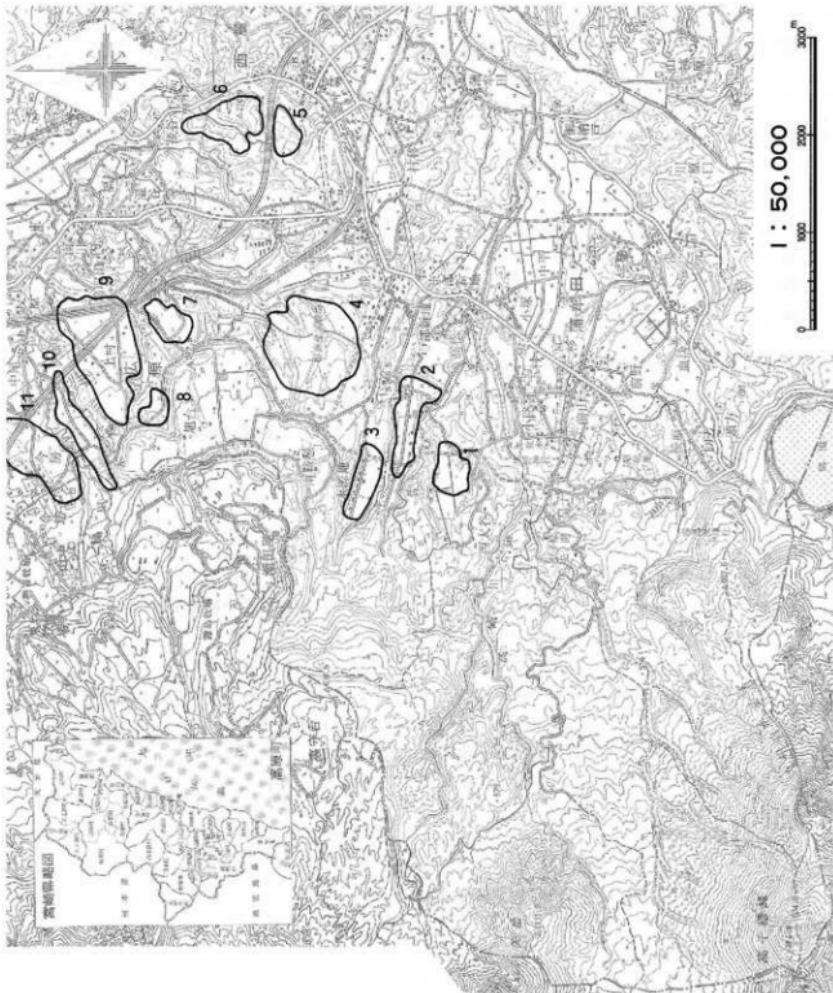
ちなみに、赤色火山灰については、平成10年3月に実施した試掘調査において、ボラ（高原スコリア）・白色火山灰・赤色火山灰が、それぞれ間に黒色土を挟んで確認された。そのうち、赤色火山灰については、薄いながらも堅く締まっている。同様の状態で、町内の他の地区の試掘調査でも確認された。

高原スコリアについては、最近までは古記録より延暦7年（788）という年代が与えられていたが、町内の荒廃遺跡（調査時遺跡名、広原地区遺跡）・立山遺跡で、スコリアの下の包含層から、9世紀後半から10世紀前半にかけての内黒土器・高台付椀・壺・円盤高台付椀・布痕土器などの土師器が出土したことによって、年代が再検討された。現在のところ高原スコリアは、11世紀から13世紀と広い幅でとらえられている。さらに古記録から推定すると、天永3（1102）年、仁和2（1157）年、寿永2（1173）年の3回に分かれて降灰したと考えられており、最初の788年という年代からは程違るものになっている。ただ、7

88年にも大噴火があり、この地方に大被害があったことは間違いないので、何らかの痕跡が残るはずである。高原スコリアの下には、先に述べたように、白色火山灰と赤色火山灰があり、荒廃遺跡では、白色火山灰が混入した黒褐色層から、上記の内黒土器などの土師器が出土していることから、赤色火山灰が当時の年代であるものと推測したい。

このように、大谷遺跡については、依然不明確な点が多いが、表採土器に焦点を当てて検証された事例もある。横手浩二郎氏が『南九州縄文通信』第8号に寄稿した「宮崎県西諸県郡高原町大谷遺跡表採の土器資料」であるが、それによると、市来式・鐘崎式・北久根山式・辛川式・丸尾式・西平式等、縄文時代後期を代表する土器型式が確認されている。又、最近の表採資料から、その型式に含みづらいものも幾つか確認されており、大谷遺跡の土器型式の多様さがうかがわれる。

こういった理由により、土器の出土量に反比例している遺跡の性格について、表採資料から少しでも遺跡の性格を探るという目的で、今回報告書を作成した次第である。



- |           |           |           |
|-----------|-----------|-----------|
| 1. 大谷遺跡   | 2. 佐土遺跡   | 3. 水源池遺跡  |
| 4. 大鹿倉遺跡群 | 5. 立山遺跡   | 6. 荒迫遺跡   |
| 7. 柳野遺跡   | 8. 鷹巣谷遺跡  | 9. 鷹巣原遺跡群 |
| 10. 立脇遺跡  | 11. 今房遺跡群 |           |

第1図 遺跡位置図及び広域周辺地形図

## 第Ⅱ章 表採資料の検討

### 第1節 遺物の考察（第2～9図）

大谷遺跡では、縄文時代後期をピークとした、縄文時代から平安時代までの遺物が大量に出土しているが、今回は最も出土量の多い縄文土器について考察する。ただ、大半が造成により壊れているため、接合できるのは全体からするとごくわずかであり、殆どは胴部等の断片である。又、膨大な量且つ表採であるため、様々な型式が混在していることもあり、この場だけの便宜上の分類として、口縁部の断面形態の状況により分類した。

I類 口縁部が「く」字状に屈曲し、外反する。

A類 表裏共に「く」字を意識して屈曲する。

B類 表面のみわずかに肥厚して「く」字となり、裏面は屈曲しない。

C類 A類よりはっきりと「く」字状に屈曲する。

D類 屈曲部が不明確なもの。

II類 口縁部が肥厚する

A類 口縁部表面が肥厚する。

a類 肥厚部の器厚がほぼ均一、下端に明瞭な段や稜線を持つ。

b類 口縁部が中くぼみ状に肥厚する。

c類 口縁部が中脹らみ状（かまぼこ状）に肥厚する。

d類 口縁上部が通常の器厚で、口縁下部のみ断面三角形状に肥厚する。

e類 口縁部がわずかに断面三角形状に肥厚する。

B類 口縁部裏面が断面三角形状に肥厚する。

C類 口縁端部のみ肥厚する。

III類 素口縁

IV類 頸部でくびれて、口縁部が外反する。

V類 その他

このように、口縁部の断面形態により 5種類に分類した。以下、各種類ごとに紹介する。

#### I類 (1～33)

今回掲載しているのは一部分だが、大谷遺跡の中で最も多く出土する形態である。多くは、鹿児島県立埋蔵文化財センターの前追亮一氏によって型式設定が成された「丸尾式」と呼ばれるもので、市来式の後続に位置する型式である。今回は「く」字状の口縁部断面形態に注目し、

A類（1～11）、B類（12～24）、C類（25～26）に大きく分類した。その他、D類として、屈曲部こそ確認できないものの、I類と推定されるものがあった（27～33）。

使用される文様には一定の規則があり、A～D類の中における文様差はあまり見られない。全てにおいて全てにおいて貝殻腹縁文が使用されている。文様について、

- a類 口線上端～稜線・・・上から貝殻腹縁文、沈線+刺突文、貝殻腹縁文の順に施文  
稜線～胴部・・・貝殻腹縁文のみ施文
- b類 a類の稜線下部文様が消失
- c類 a類の稜線上部の文様構成に乱れが起こる
- d類 稜線上下部共に貝殻腹縁文のみ施文（たまに口縁端部に貝殻腹縁文を追加施文する）
- e類 無文

のように、5種類に分類できる。

A類では、a～d類各種文様があるが、B・C類ではこれら5種類の他に、横位の凹線文と、斜方向の連続刺突文を施したもの登場する。

## II類（34～100）

口縁部が肥厚する一群であるが、大谷遺跡では、I類に次いで多く出土する。その殆どが口縁部に幅広の肥厚帯を持ち、文様も、一部裏面に施文するものもあるが、たいていは肥厚帯に集中する。今回はその肥厚帯について、A類（34～90）、B類（91）、C類（92～100）に分類した。又、の中でもA類については、その肥厚の仕方によりさらに分けることができ、a類（34～50）、b類（51～61）、c類（62～64）、d類（65～79）、e類（80～90）の5種類に分類した。ただ、b類とd類の区別を付けがたいものも含まれていたり、I類と見間違うようなものなども含まれている。

文様は、a類では短直線を主体とした文様が多く、斜位の短沈線文（34～37）、横位の沈線文（38～40）、斜線を2組使用した綾杉文（41）、縦位の短沈線文（42～43）、連続刺突文（44～47）、横位の短沈線文（48～50）、などがある。なお、42には、口縁肥厚部の下に貼付文の一部が残存している。a類のみが、わりと単純な文様で構成されている。

b類の文様では、斜位の短沈線文（51～52）、横位の沈線文（53）のみがa類と共に見えるような文様である。その他は、肥厚部下端に刻目突帯を持つもの（54～57）や、一見II-A-d類と混同するが、口縁部上端で明確に稜線を作っている一群（58～61）、等がある。文様は、短沈線文（58）、刺突文と貝殻条痕文の組合せ（59）、連続刺突文と沈線の組合せ（60～61）、等がある。又、裏面に施文するものも見られ（53・58）、短沈線文が主体だが、53ではさらに作り、施文法が非常に雑な把手を貼り付ける。その他、口唇部に繩文を施すものも見られた（57）。

c類は殆ど見ることはないが、口縁部上端に貝殻腹縁文、その下に横位の沈線を施すもの（62）、貝殻腹縁文を施すもの（63）、無文（64）がある。64ではさらにM字の貼付文を施す。

d類の文様は、他類と同様のものが多いが、その他では堅杵状の縦位短沈線文（77）、山

形口縁頂部及び口唇部に縄文を施すもの（78）などがある。

e類の文様は、わずかに肥厚する口縁部に、浅い斜位の沈線を施すものが主流だが、横位の貝殻腹縁文を施すもの（87）や、口唇部に縄文を施すもの（80）などがある。

B類は1点見られた（91）。口縁部裏側が三角形状に肥厚し、沈線・竹管円文などを施す。松山式と思われるものである。

C類は、口縁部上端のみ三角形状に肥厚したものである。文様は、肥厚部に集中するものと、口縁部から胴部にかけて施文するものがある。92は肥厚部に1本横位の沈線を施文、その下に貝殻腹縁文を施している。その他、横位の連続刺突文（93～95）、等の文様を施す。

又、縄文を施すものがよく見られた（96～100）。多くは口縁肥厚部に充填するか、口縁部から胴部にかけて、沈線で区画された中に縄文を施しているもの、と2種類ある。96・98・99は口縁肥厚部に縄文を施しているが、98は裏面に渦巻文、99は胴部の沈線区画外にも縄文を施している。97・100は口縁肥厚部に、短沈線文・渦巻文・刺突文などを施す。ただ、縄文の施文方法については、かなり雑である。

### III類（101～106）

胴部より真直ぐに口縁部が立ち上がる一群である。その殆どは口縁部上端より少し下に貝殻腹縁文を施している（101～104）。106は一応口縁部が肥厚しているものの、湾曲は全く見られない。又、非常に特徴のある貼付文を施している。106は非常に雑な縦位の短沈線を施文している。

### IV類（107～112）

頸部より緩やかに外反する一群で、器厚は殆ど変化しない。文様は、貝殻腹縁文が殆どで、施文場所も頸部のくびれた所と決まっている（107～111）。111のみ口唇部がほんの少し受け口状となる。112は口縁部上端に縄文、頸部下に沈線と縄文を施す。

### V類（113～123）

ここでは、上の分類では分けにくいものを掲載している。

113～115は北久根山式の深鉢である。表裏とも箆で磨き、沈線で作った区画内に縄文を充填している。

116は西平式の深鉢である。口縁部を「く」字状に強く屈曲させ、内側に向いた部分を文様帯とする。沈線で区画した中に縄文を充填し、波頂部には「V」字状の切り込みを入れる。

117・118は台付皿である。主に内側に文様を施している。貝殻腹縁文を施すもの（117）と、沈線と竹管円文を施したもの（118）がある。

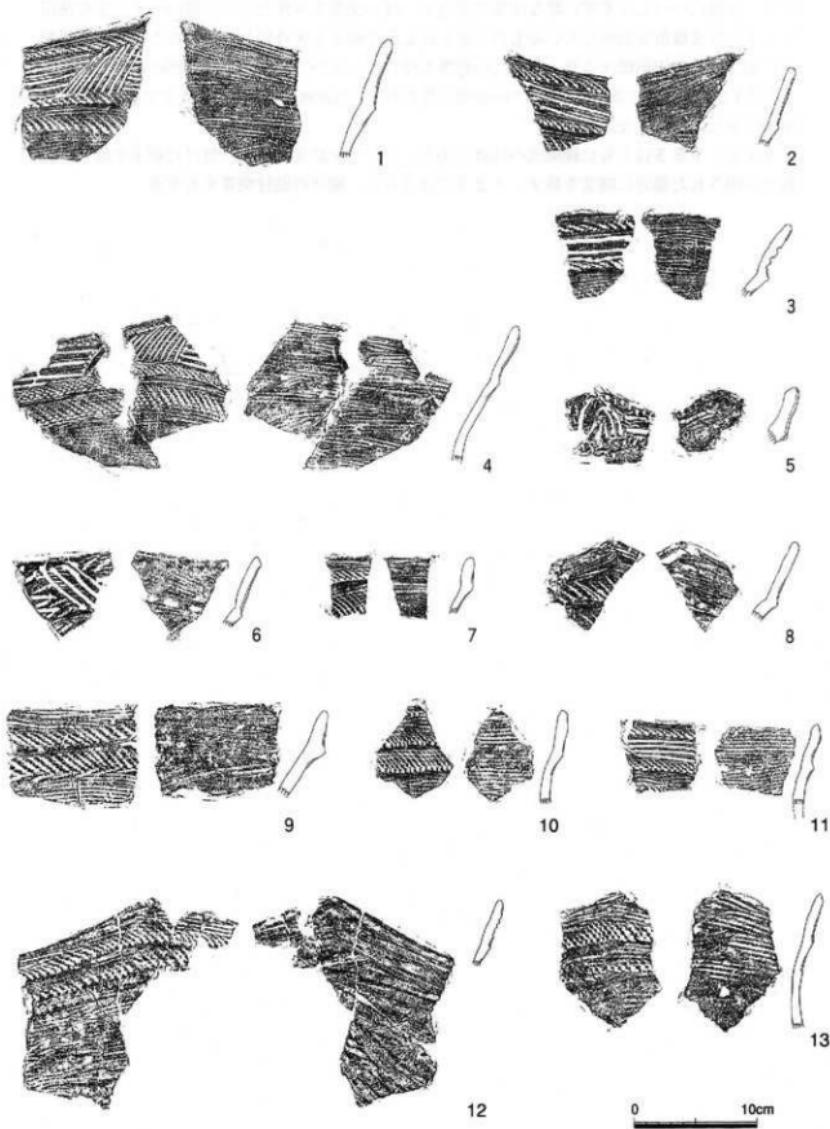
119は曾畠式の口縁部である。特徴的な横位の短沈線を施している。

120は型式不明の深（浅？）鉢である。口縁部から胴部にかけて約1/3残存している。胴部が眼らみ、頸部でくびれており、口縁部～胴部にかけて四方向にそれぞれ突帯を付している。

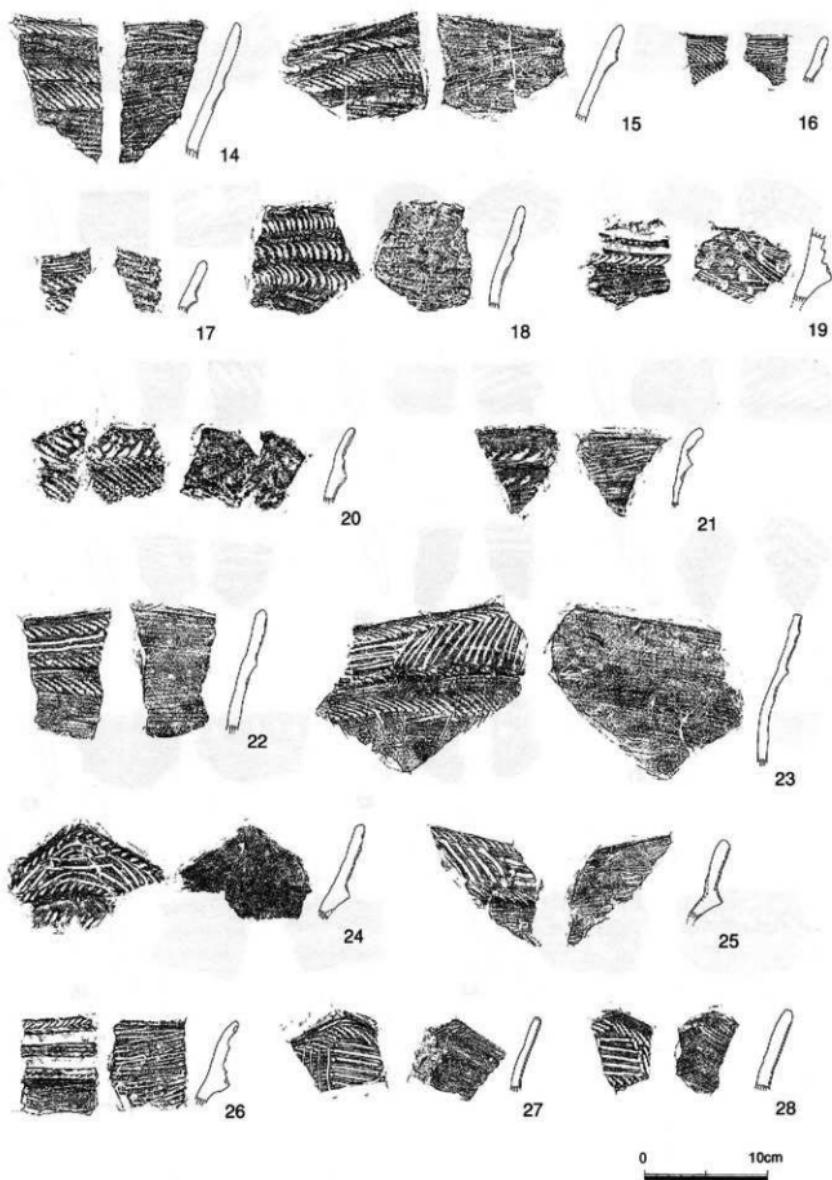
口唇部には「V」字状の突起を付け、頸部から胴部にかけてはフジツボ状の突起を2個ずつ付ける。文様については非常に雑な印象を受ける。浅い沈線を主体として、器径の1/2を使用して1つの文様帯を形成しているものと思われる。平成9年8月におこなわれた宮崎縄文研究会に来られた本田道輝氏より、草野式の影響を受けているのでは、という見解が出された。

121は底部断片である。120の同個体と思われる。底面縁辺部は白く磨きがかかっており、中央で少し上げ底となる。

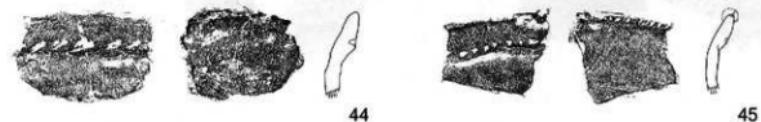
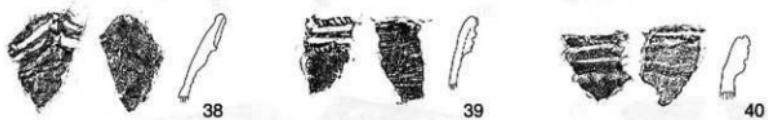
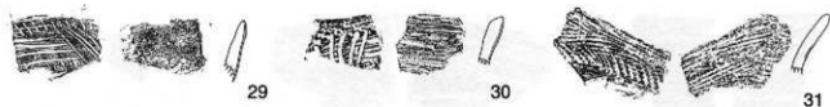
122・123はともに鐘崎式の浅鉢である。フジツボ状突起を貼り付けた把手を持ち、沈線で区画された部分に縄文を施す。123ではさらに、縄状の貼付突帯を有する。



第2図 大谷遺跡表探土器実測図（1）

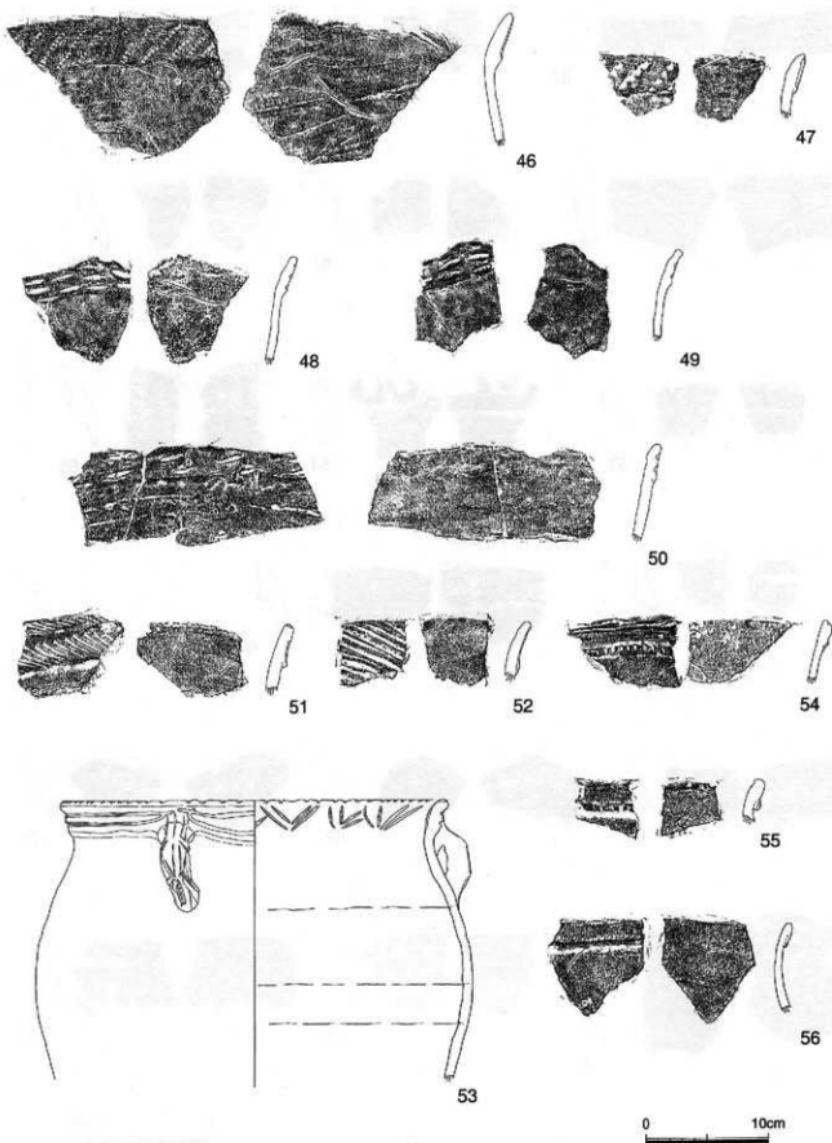


第3図 大谷遺跡表採土器実測図（2）



0 10cm

第4図 大谷遺跡表土器実測図(3)

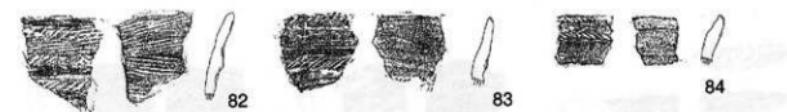
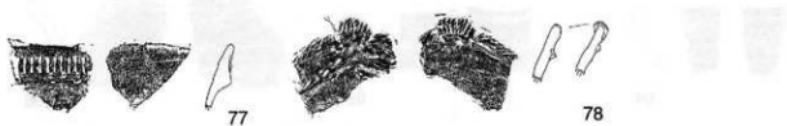


第5図 大谷遺跡表採土器実測図(4)



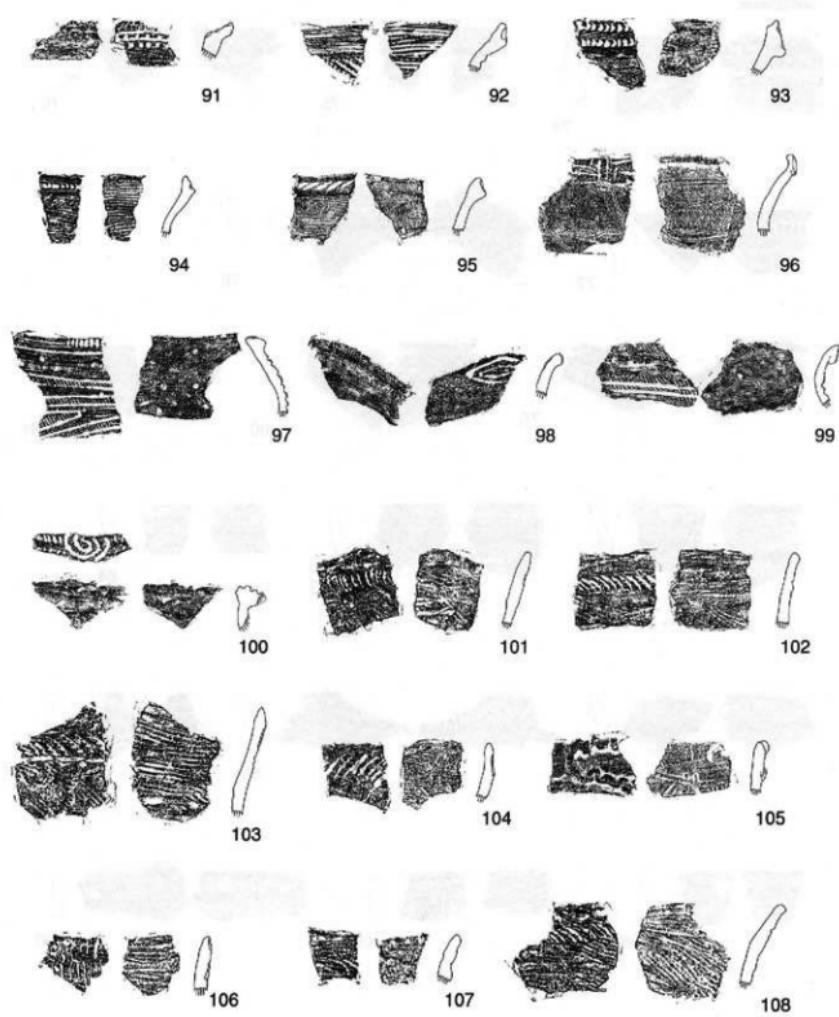
0 10cm

第6図 大谷遺跡表採土器実測図（5）



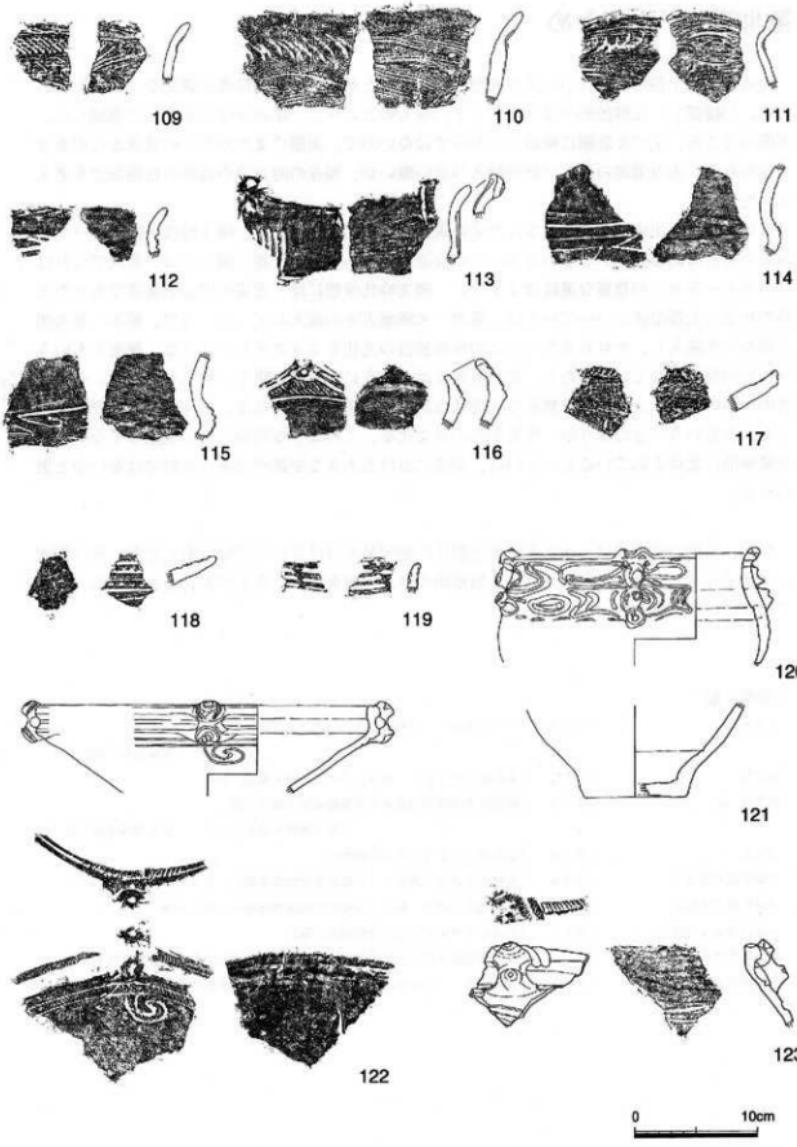
0 10cm

第7図 大谷遺跡表採土器実測図（6）



0 10cm

第8図 大谷遺跡表採土器実測図（7）



第9図 大谷遺跡表土器実測図(8)

### 第III章　まとめ

今回、表採土器の一部についての考察をおこなったが、表採土器自体が細片かつ膨大な量のため、口縁部で、比較的形のはっきりしているものという、一応の区切りをおいて選別した。実際のところ、全てを詳細に検討したわけではないので、実際にまだかなりの見落としがあると思われる。大谷遺跡の正しい歴史観とは言い難いが、現在の時点での遺跡の性格などを考えてみたい。

大谷遺跡は、平成7年におこなった発掘調査でも判明したように、縄文時代後期がピークであったことは間違いないと思われる。その交流の幅であるが、土器に関しては、町内でこれほどバリエーションの豊富な遺跡はまずない。縄文時代後期には、近辺の中心的集落であったと思われる。土器型式についていえば、薩摩・大隅地方から流入してくる一方で、熊本・北九州方面からも流入し、それらをさらにこの地域独自の文化をミックスしたような、亜流ともいるべきものが造られている。ただ、どれも直産品というには造りが粗く、胎土も異なる。その地方の土器の形態・文様等を複数見て、曖昧な記憶のまま作成した結果、こういった形態にいたった、ともいいくべきだろうか。外来からの異文化を、このような周囲に人の気配のしない地域が積極的に受け入れているというのは、交流における大きな中継点であったのではないかと思われる。

今回、当初の計画では、それぞれの土器片に型式名を付けていく予定であったが、その型式には納まりきらないものが多く、又、数種類の型式の折衷のようなものも含まれるため、あえて紹介という形態をとった。

#### (参考文献)

- |               |   |
|---------------|---|
| 永友良典          | 1991 「下弓田遺跡－資料編1－」『埋蔵文化財調査研究報告』IV<br>宮崎県総合博物館   |
| 前庭亮・<br>横手浩二郎 | 1992 「異系統土器文化の一端点」『南九州縄文通信』No.6<br>1994 「宮崎県西諸県郡高原町大谷遺跡表採の縄文土器」<br>『南九州縄文通信』No.8 南九州縄文研究会 |
| 富田敏一          | 1996 「北久根山」肥後古代文化研究所  |
| 宮崎県教育委員会      | 1996 「広原地区遺跡の調査」『宮崎県文化財調査報告』第39集  |
| 宮崎県教育委員会      | 1997 「県内遺跡の調査一覧」『宮崎県文化財調査報告』第40集  |
| 宮崎県埋蔵文化財センター  | 1997 「平成8年度埋蔵文化財発掘調査一覧」   |
| 高原町教育委員会      | 1998 「高原町遺跡詳細分布調査報告書」『高原町文化財調査報告書』第3集   |
| 宮崎県埋蔵文化財センター  | 1998 「荒追遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第11集  |

第1表 大谷遺跡表採土器観察表（1）

番号	部位	調 整 文 標				色 調				胎 土	備 考
		外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
1	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文 横位沈縫（端部刺突） 斜位沈縫	な	し	黒 極 (Hex2. ST 1/2)	黒 極 (Hex5TR 6/4) 褐 灰 (Hex10TR 1/4)	1mmの透明砂粒、0.5 mmの白色砂粒を多く含む	丸尾式に 相当	
2	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文 横位沈縫（端部刺突） 斜位沈縫	な	し	褐 (Hex5TR 4/6) 黒 極 (Hex5TR 3/1)	に赤い赤褐色 (Hex5TR 5/4)	0.5mmの黄灰色砂粒を 少し含む	丸尾式に 相当	
3	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文 横位沈縫（端部刺突） 斜位沈縫	な	し	褐 (Hex5TR 4/6) 赤 褐 (Hex2. ST 4/1)	褐 (Hex5TR 4/6)	0.5mmの白色砂粒を多 く含む	丸尾式に 相当	
4	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文 斜位沈縫	な	し	黒 極 (Hex10TR 5/1)	明 赤 極 (Hex5TR 5/1)	1~1.5mmの白色砂粒 を多く含む	丸尾式に 相当	
5	深 鉢 口縁部	ナ デ	貝殻条痕 ナ	無文 横位沈縫 同心半円状沈縫	な	し	に赤い赤褐色 (Hex5TR 3/2) 褐 灰 (Hex10TR 5/1)	灰 黄 (Hex2. ST 4/2) 褐 灰 (Hex10TR 4/1)	0.5~1.5mmの黄灰 色砂粒を多く含む		
6	深 鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ	斜方向の散漫な貝殻腹 縫文 斜位・横位沈縫（端部刺突）	な	し	に赤い褐 (Hex7. ST 3/1) 黒 極 (Hex7. ST 2/1)	に赤い赤褐色 (Hex5TR 5/4)	0.5mm以下の白色砂粒 を多く含む		
7	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	褐 灰 (Hex5TR 4/1) に赤い褐 (Hex7. ST 2/1)	褐 (Hex5TR 4/6)	0.2mmの黄灰色砂粒を 少し含む		
8	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	黒 極 (Hex10TR 3/1) 褐 灰 (Hex5TR 6/1)	黒 極 (Hex10TR 1/1)	0.5~1mmの白色砂粒 を多く含む		
9	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕 ナ	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	褐 (Hex5TR 2/2) 黄 極 (Hex2. ST 5/1)	褐 (Hex5TR 4/3) 浅 黄 褐 (Hex10TR 4/4)	1mmの黄灰色砂粒、0. 5~1mmの透明粘物を多 く含む		
10	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	褐 (Hex5TR 4/4)	褐 (Hex5TR 4/4)	0.5~1mmの白色砂粒、 0.2~0.3mmの透明 粘物を多く含む		
11	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	黒 極 (Hex5TR 3/1) 褐 (Hex7. ST 6/6)	黒 極 (Hex7. ST 2/1)	0.5~1mmの黄灰色砂 粒を多く含む	丸尾式に 相当	
12	深 鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文 横位沈縫（端部刺突）	な	し	灰 (Hex 1/4)	明 赤 極 (Hex2. ST 3/2)	0.5~2mmの無色砂粒 を多く含む		
13	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕 ナ	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	に赤い黄褐色 (Hex10TR 3/1) 黒 極 (Hex10TR 1/1)	褐 (Hex5TR 4/4)	0.5~1mmの黄灰色砂 粒を多く含み、2~5mm の赤褐色石を少し含む		
14	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	褐 灰 (Hex10TR 4/1) に赤い褐 (Hex7. ST 2/1)	褐 (Hex5TR 4/6)	1mmの白色・黄灰色砂粒 を多く含む		
15	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	黒 極 (Hex5TR 5/1)	灰 極 (Hex7. ST 3/2)	0.5mmの黄灰色砂粒、 黑色粘物を多く含む		
16	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	黒 極 (Hex7. ST 2/1) 褐 (Hex5TR 6/6)	黒 極 (Hex7. ST 2/1)	0.2mmの黑色粘物を多 く含む		
17	深 鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻腹縫文	な	し	黄 灰 (Hex2. ST 4/1) に赤い褐 (Hex7. ST 2/1)	黄 灰 (Hex2. ST 4/1) に赤い褐 (Hex7. ST 2/1)	0.5~1mmの黄灰色砂 粒を多く含む		
18	深 鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ	縱位の爪形文	な	し	オリーブ黒 (Hex2. ST 5/1) 灰 灰 (Hex2. ST 4/1)	灰 灰 (Hex5TR 4/1)	1~2mmの黄褐色砂粒、 0.5mmの透明粘物を多 く含む		

第2表 大谷遺跡表探土器観察表(2)

遺物番号	器種部位	調査文様				色調	胎土	備考
		外面	内面	外面	内面			
19 深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕	横方向の貝殻縦線文 斜方向の連続刺突文	な	し	橙 (Hes.7. STTR/4) 褐灰 (Hes.10TR 4/1)	1mmの黄灰色砂粒、黒色 粘物、2mm前後の透明粘 物を多く含む	
20 深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕	斜方向の貝殻縦線文 斜方向の連続縦沈線文 (端部刺突)	な	し	明赤褐 (Hes.2. STTR/6) 褐灰 (Hes.2. STTR/4) 青黑 (10TR 1/1)	0.5~2mmの金色雲母 を多く含む	
21 深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻縦線文	な	し	にぶい褐 (Hes.7. STTR/4)	にぶい褐 (Hes.7. STTR/1)	0.5~5mmの黄灰色砂粒を 少し含む
22 深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻縦線文 斜方向の貝殻縦線文 (端部刺突)	な	し	褐灰 (Hes.7. STTR/4)	褐灰 (Hes.5TR 4/1)	0.5mm以下の光沢砂粒 を多く含む
23 深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻縦線文 斜方向の貝殻縦線文 (端部刺突)(端部刺突)	な	し	黒褐 (Hes.7. STTR/1)	明赤褐 (Hes.5TR 5/6)	2mm前後の黄灰色砂粒、 0.5~5mmの金色雲母を多 く含む
24 深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ デ	斜方向の貝殻縦線文 不定方向の沈線	な	し	黒褐 (Hes.5TR 1/1)	にぶい褐 (Hes.7. STTR/4) 褐灰 (Hes.7. STTR/1)	1mmの褐色砂粒、1~2 mmの金色雲母を多く含む
25 深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻縦線文 斜方向の貝殻縦線文 (端部刺突) 斜方向の貝殻縦線文 (端部刺突)	な	し	明赤褐 (Hes.2. STTR/6) 黒褐 (Hes.5TR 1/1)	赤 (Hes.10R 5/6)	0.5mmの黒色砂粒を多 く含む
26 深鉢 口縁部	ナ デ	貝殻条痕	斜方向の連続刺突文 斜方向ビ曲線	な	し	褐灰 (Hes.10TR 4/1) 明赤褐 (Hes.5TR 5/6)	明赤褐 (Hes.5TR 5/6)	1mmの黄灰色砂粒を多く 含む
27 深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ デ	斜方向の貝殻縦線文 斜方向の貝殻縦線文 (端部刺突) 斜方向の貝殻縦線文 (端部刺突)	な	し	黒褐 (Hes.7. STTR/1)	明赤褐 (Hes.5TR 5/6)	0.2mmの白色砂粒を多 く含む
28 深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ デ	斜方向の貝殻縦線文 斜方向の貝殻縦線文 (端部刺突)	な	し	黒褐 (Hes.10TR 2/1)	にぶい褐 (Hes.7. STTR/4)	0.5~1mmの白色砂粒 を多く含む
29 深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ デ	斜方向の連続縫沈線 斜方向の連続縫沈線 斜方向の連続縫沈線	な	し	黒褐 (Hes.10TR 2/1) 黄灰 (Hes.2. ST 1/1)	明赤褐 (Hes.2. STTR/4)	0.5~1mmの黄灰色砂 粒を多く含む
30 深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻縦線文 斜方向の貝殻縦線文 (端部刺突)	な	し	褐灰 (Hes.7. STTR/1)	暗灰 (H 1/0)	0.5mm以下の白色砂粒 を多く含む
31 深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向の貝殻縦線文	な	し	明赤褐 (Hes.7. STTR/4) 黒褐 (Hes.10TR 2/1)	灰黄褐 (Hes.14TR 4/2)	0.5mm前後の黒色光沢 粘物、0.5~2mmの透 明砂粒を多く含む
32 深鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜方向の貝殻縦線文 斜方向の短凹線文 (端部刺突)	な	し	浅黄 (Hes.10TR 1/1) にぶい黄褐 (Hes.10TR 4/1)	橙 (Hes.5TR 6/6)	0.2~2mmの金色雲母、 1mmの黄灰色砂粒を多 く含む
33 深鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜方向の貝殻縦線文 不定方向の豊凹線 (端部刺突)	な	し	黒褐 (Hes.10TR 1/1) にぶい黄褐 (Hes.10TR 4/1)	にぶい褐 (Hes.7. STTR/4) にぶい褐 (Hes.7. STTR/4)	0.5~2mmの褐色砂粒、 0.5~2mmの金色雲母を多 く含む
34 深鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜方向の豊凹線文	な	し	褐灰 (Hes.7. STTR/1)	赤褐 (Hes.2. STTR/6) にぶい褐 (Hes.7. STTR/4)	1~2mmの褐色砂粒、黄 色砂粒を多く含む
35 深鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜方向の短凹線文	な	し	にぶい褐 (Hes.7. STTR/4)	橙 (Hes.7. STTR/6)	1~2mmの白色砂粒、3 ~4mmの褐色砂粒を多く 含む
36 深鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜方向の短凹線文	な	し	黒褐 (Hes.7. STTR/1) 褐灰 (Hes.10TR 1/1)	明赤褐 (Hes.2. STTR/4)	2mmの黄灰色砂粒を多く 含む
37 深鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜方向の短凹線文	な	し	にぶい褐 (Hes.10TR 2/4) 褐灰 (Hes.10TR 4/1)	にぶい黄褐 (Hes.10TR 4/2) 褐灰 (Hes.10TR 4/1)	2mmの白色砂粒を少し含 む

第3表 大谷遺跡表採土器観察表（3）

通 番 号	器 種 部 位	調 整		文 様		色 調		胎 土	備 考
		外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
38	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	横位短円線文 継ぎ目点文		な し	黒 褐 (Hest. STR 1/1)	灰 褐 (Hest. STR 1/1)	1mm前後の黄灰色砂粒、 灰色砂粒、0.5mm以下の 透明光沢物を多く含む
39	深 鉢 口縁部	ミ ガ キ	ミ ガ キ	斜方向の連続刻突文 斜位沈縫		な し	にぶい褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	褐 (Hest. STR 1/1)	0.5mmの白色砂粒を多 く含む
40	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	横位沈縫(口縁部・口縁部)		な し	盤 (Hest. STR 1/1)	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1)	2~3mmの褐色砂粒を少 し含む
41	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜位沈縫の組み合わせ		な し	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	0.5mmの黄灰色砂粒を 少し含む
42	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	縱方向の連続刻突文		な し	黒 褐 (Hest. STR 1/1)	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1)	1mmの白色砂粒を少し含 む
43	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	縱方向の連続刻突文		な し	褐 灰 (X 1/1)	褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	1mmの透明砂粒を多く含 む
44	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜方向の連続刻突文		な し	黒 褐 (Hest. STR 1/1) 盤 (Hest. STR 1/1)	灰 黄 褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	1~1.5mmの黄灰色砂 粒、1mmの透明砂粒を多 く含む
45	深 鉢 口縁部	ナ デ	ミ ガ キ	口縁部連続刻突文 口縁部連続刻突文		な し	盤 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	にぶい褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	0.2~0.3mmの光沢 物を多く含む
46	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜位連続刻突文を斜方 向に施文		な し	盤 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (X 1/1)	褐 (Hest. STR 1/1)	0.2~0.3mmの透明 光沢砂粒を多く含む
47	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜位半円状連続刻突文 を斜方向に施文		な し	にぶい褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	にぶい褐 (Hest. STR 1/1)	3mmの赤褐色砂粒を少 し含む
48	深 鉢 口縁部	ナ デ	ミ ガ キ	横位短沈縫を横方向に 施文		な し	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1)	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1) 灰 (X 4/4)	1mmの白色透明砂粒を多 く含む
49	深 鉢 口縁部	ナ デ	ミ ガ キ	横位員股線文を横方 向に施文		な し	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (X 1/1)	0.5~1mmの灰色砂粒 を少し含む
50	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜位短沈縫を横方向に 施文		な し	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1) 盤 (Hest. STR 1/1) 黑 褐 (Hest. STR 1/1)	褐 褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (Hest. STR 1/1)	0.5~1.5mmの灰黑色 砂粒を多く含む
51	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	口縁部 斜方向連続刻 突文 口縁部 斜方向連続刻 突文		な し	黑 褐 (Hest. STR 1/1)	明 赤 褐 (Hest. STR 1/1)	0.5~1mmの透明砂粒 を多く含む
52	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	斜方向連続短沈縫		な し	灰 黄 褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (X 1/1)	にぶい褐 (Hest. STR 1/1)	2mmの白色砂粒を多く含 む
53	深 鉢 口縁部 ~肩部	ナ デ	ナ デ	口縁部刻目 後位沈縫 不定方向沈縫付把手		破 片 状 沈 縫	にぶい褐 (Hest. STR 1/1) 黑 褐 (Hest. STR 1/1)	にぶい黄褐 (Hest. STR 1/1)	1mmの白色、灰色、黑色 砂粒を多く含む
54	深 鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	刻目文		な し	褐 灰 (Hest. STR 1/1) 黑 褐 (Hest. STR 1/1)	明 赤 褐 (Hest. STR 1/1) 灰 黄 褐 (Hest. STR 1/1)	2mmの黄灰色砂粒を少し 含む
55	深 鉢 口縁部	ナ ミ ガ キ	ナ デ	刻日文		な し	明 赤 褐 (Hest. STR 1/1) 褐 灰 (X 1/1)	明 赤 褐 (Hest. STR 1/1)	1~3mmの透明物、0. 2~0.5mmの黄灰色砂 粒を多く含む

第4表 大谷遺跡表採土器観察表(4)

番号	器種	調査				色	調査	胎土	備考	
		外面	内面	外面	内面					
56	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	刻目文	なし	にぶい赤褐色 (Hx+ST 5/4) 褐色 (Hx+ST 5/2)	にぶい赤褐色 (Hx+ST 5/4) 褐色 (Hx+ST 4/2)	0.2~0.3mmの白色 光沢礫物を多く含む
57	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	口唇部 繩文 口縁部 斜方向連続刻突文	なし	灰 (Hx+ST 5/2)	灰 (Hx+ST 5/2)	1mmの透明砂粒を少し、 0.5mmの黄灰色砂粒を 多く含む
58	深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜方向連続刻突文	斜方向連 続短縦線		黒褐色 (Hx+1TY 1/2)	褐 (Hx+ST 6/6)	0.5mmの白色砂粒を少 し、1mmの透明砂粒を多 く含む	
59	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	横位目殻条痕文 横位連続刻突文	なし	黒褐色 (Hx+ST 5/2) にぶい橙 (Hx+ST 4/2)	黒褐色 (Hx+ST 5/2) 褐色 (Hx+ST 4/2)	0.5~2mmの白色砂粒、 0.5~1mmの白色礫物 を多く含む
60	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	斜方向の連続刻突文 横位短縦線	なし	褐 (Hx+ST 4/2) 黒褐色 (Hx+1TY 3/2)	褐 (Hx+ST 4/2)	0.2~1mmの黄灰色砂 粒を多く含む
61	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	斜方向の連続刻突文 横位短縦線	なし	褐 (Hx+ST 4/2)	灰 黄 (Hx+2 ST 4/2) 褐色 (Hx+1TY 4/2)	0.3mmの白色砂粒を多 く含む
62	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ	新位の貝殻縫合線 横位短縦線		なし	暗褐色 黄 (Hx+2 ST 5/2)	にぶい黄褐色 (Hx+1TY 7/4)	1~2mmの白色砂粒、透 明砂粒、黒色砂粒を多く、 1mmの金色雲母を少し含 む	
63	深鉢 口縁部	ミガキ ナ	ミガキ ナ	ナ	デ	斜位の貝殻縫合線文	なし	暗褐色 (Hx 4/0)	にぶい褐 (Hx+7 ST 3/2)	0.5~1mmの黄灰色砂 粒を多く含む
64	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	口唇部 M字貼付文	なし	黒褐色 (Hx+7 ST 3/2)	褐 (Hx+ST 6/6)	0.5~2mmの黄灰色砂 粒を多く含む
65	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ	斜方向の連続刻突文 横位凹縦線		なし	灰 (Hx+ST 4/2) オリーブ黒 (Hx+ST 3/2) 灰褐色 (Hx+ST 7/2)	灰 黄 (Hx+2 ST 6/2)	0.2~0.5mmの灰色 礫物を多く含む	
66	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	斜方向の連続刻突文 横位凹縦線	なし	にぶい黄褐色 (Hx+1TY 1/2)	暗褐色 (Hx 2/0)	0.5mmの金色雲母、1 mmの黄灰色砂粒を多く含 む
67	深鉢 口縁部	ナ	デ	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ	口唇部 斜方向連続刻突文 口縁部 斜方向連続刻突文 四点文	なし	にぶい黄褐色 (Hx+1TY 6/3) 黑褐色 (Hx+1TY 3/2)	暗褐色 (Hx 3/2) 灰 黄 褐 (Hx+1TY 6/2) 灰 黄 (Hx+2 ST 4/2)	1mmの白色砂粒を多く含 む
68	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ	斜方向連続刻突文 横位凹縦線		なし	黒褐色 (Hx+1TY 3/2)	褐 (Hx+7 ST 6/6) 褐色 (Hx+1TY 4/2)	0.5mmの黄灰色砂粒を 多く含む	
69	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	横方向連続刻突文	なし	暗褐色 (Hx 2/0)	にぶい黄褐色 (Hx+1TY 6/2) 灰 黄 褐 (Hx+1TY 6/2)	0.5mmの黄灰色砂粒を 多く含む
70	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	横方向連続刻突文	なし	褐 (Hx+7 ST 7/2) 暗褐色 (Hx 1/0)	にぶい黄褐色 (Hx+1TY 6/2) 褐 (Hx+1TY 4/2)	1~3mmの灰色砂粒を多 く含む
71	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	扁状刻突文	なし	褐 (Hx+7 ST 6/6) 褐 (Hx+7 ST 4/2)	黑褐色 (Hx+7 ST 2/2)	0.5mm以下の光沢砂粒 を多く含む
72	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ	貝殻条痕 ナ	斜位連続刻突文を斜方 向に施す		なし	褐 (Hx+7 ST 6/6) 褐 (Hx+7 ST 5/2)	褐 (Hx+7 ST 6/6) 褐 (Hx+7 ST 4/2)	0.5mmの黄灰色、白色 砂粒を多く含む	

第5表 大谷遺跡表採土器観察表（5）

番号	器種	測整		文		様		色調		胎土	備考	
		外面	内面	外面	内面	外面	内面	外面	内面			
73	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	斜位貝殻模様文を横方 向に施文	な	し	灰 黄 極 (Hes10YR 5/2) 黒 極 (Hes10YR 3/1)	にぶい黄 (Hes2.5YR 4/3)	0. 5 mmの透明粘物を多 く、2 mm級の黄灰色砂粒 を少し含む	
74	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	口唇部 斜方向連続刺突文 口縁部 斜位貝殻模様文を斜方 向に施文	な	し	暗灰 (Hes 3/3) にぶい黄 (Hes2.5Y 4/3)	にぶい黄極 (Hes10YR 1/2)	0. 5 mmの黄灰色砂粒、 透明粘物を多く含む	
75	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	ミ ガキ	横方向の連続刺突文 斜位貝殻模様文を斜方 向に施文	な	し	橙 (Hes10T 4/4) 褐灰 (Hes10YR 5/1) 褐灰 (Hes 3/0)	橙 (Hes10T 4/4) 灰 黄 (Hes2.5Y 4/2)	0. 5 mmの白色砂粒を多 く含む	
76	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	斜位貝殻模様文を斜方 向に施文	な	し	オリーブ黒 (Hes5T 3/1)	にぶい黄 (Hes2.5YR 4/4) 灰 (Hes10YR 4/1)	1. 5~2 mmの褐色砂粒 を多く含む	
77	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	腹位縫合状突文を横 方向に施文	な	し	褐灰 (Hes10T 4/1)	橙 (Hes2.5YR 4/4)	1 mmの透明砂粒、黄灰色 砂粒を多く含む	
78	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	口唇部 穴開き刺突文 口縁部 波頂部に貼付突窓	な	し	オリーブ黒 (Hes5T 3/1)	にぶい黄極 (Hes10YR 3/4) 褐灰 (Hes10YR 4/1)	0. 5~1 mmの黄灰色砂 粒を多く含む	
79	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	ミ ガキ	網目突窓	な	し	にぶい黄極 (Hes10T 7/4) 褐灰 (Hes10YR 5/1)	にぶい黄極 (Hes10YR 7/4) 褐灰 (Hes10YR 5/1)	1 mmの黄灰色砂粒を少 し含む	
80	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	口唇部 網文 口縁部 斜位刺突文を横方 向に施文	な	し	橙 (Hes2.5YR 4/4) 褐灰 (Hes2.5YR 4/1)	にぶい黄 (Hes2.5YR 4/4)	0. 5~1 mmの黑色粘物 を多く含む	
81	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	斜位刺突文を横方向に 施文	な	し	黄灰 (Hes2.5Y 4/1)	灰 黄 (Hes2.5Y 4/2)	0. 2~0. 3 mmの黄灰 色砂粒を多く含む	
82	深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕	斜位貝殻模様文を斜方 向に施文	な	し	黒褐 (Hes10T 3/1)	明赤褐 (Hes2.5YR 4/4) 黒褐 (Hes10YR 3/1)	1 mmの透明砂粒、0. 5 mmの黄灰色砂粒を多く含 む			
83	深鉢 口縁部	ミ ガキ ナ	ミ ガキ ナ	斜位刺突文を横方向に 施文	な	し	暗灰 (Hes 3/0)	橙 (Hes10T 5/1) 橙 (Hes2.5T 4/4)	0. 5 mmの透明光沢粘物、 1 mmの黄灰色、白色砂粒 を多く含む			
84	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	斜位刺突文を横方向に 施文	な	し	にぶい黄極 (Hes2.5T 4/1)	橙 (Hes2.5T 4/6)	1~2 mmの灰色砂粒、橙 色砂粒を少し含む	
85	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	ミ ガキ	口唇部 斜位の貝殻模 様文 口縁部 斜位沈窓を横 方向に施文	な	し	オリーブ黒 (Hes5T 3/1)	にぶい黄 (Hes2.5YR 4/4) 灰 (Hes2.5Y 4/1)	2 mmの褐色砂粒、0. 5 mmの透明砂粒を少し含む	
86	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	不定方向の短沈窓	な	し	明赤褐 (Hes2.5YR 5/6) 褐 (Hes2.5YR 4/4) 暗灰 (Hes 3/0)	橙 (Hes2.5YR 4/6)	0. 5~3 mmの黄灰色砂 粒を多く含む	
87	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	斜位貝殻模様文	な	し	橙 (Hes2.5YR 4/4)	にぶい黄極 (Hes10YR 7/4)	1 mmの透明砂粒、0. 5 mmの透明粘物を少し含む	
88	深鉢 口縁部	貝殻条痕	貝殻条痕 ナ	斜位貝殻模様文を横方 向に施文	な	し	灰 黄 極 (Hes10YR 6/5)	灰 白 (Hes10YR 2/1) 暗灰 (Hes10YR 1/1)	1~2 mmの灰黄色砂粒を 少し含む			
89	深鉢 口縁部	ナ	デ	ナ	デ	口唇部 斜位刺突文 口縁部 斜位爪形文	な	し	オリーブ黒 (Hes5Y 3/1) 黄灰 (Hes2.5Y 4/1)	灰 (Hes2.5Y 4/1)	1~3 mmの黄灰色砂粒を 多く含む	
90	深鉢 口縁部	ナ	デ	ミ ガキ ナ	デ	刺突文を横方向に施文	な	し	黑褐 (Hes2.5YR 2/1)	明赤褐 (Hes2.5YR 4/6)	0. 5~2 mmの黄灰色砂 粒を多く含む	

第6表 大谷遺跡表採土器観察表（6）

番号	器種	調査基文				色調	胎土	備考	
		外面	内面	外面	内面				
91	深鉢 口縁部	ナ デ 貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	な	し	横位沈線 有管円文	にぶい褐 (Hes7. STS5/4)	にぶい橙 (Hes7. STS4/4)	0. 2~0. 3mmの黒色 鉱物を多く含む 板山式に 相当
92	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	巴点文 斜位貝殻縫縁文	な	し	にぶい黄橙 (Hes10TY 3/4) 褐 灰 (Hes10TY 3/0)	橙 — (Hes10TY 4/4)	1mmの白色砂粒を多く含 む
93	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	ナ デ	D字刺突文を横方向に 施文	な	し	橙 (Hes10TY 4/4)	にぶい橙 (Hes10TY 4/4)	1mmの灰色砂粒を多く含 む
94	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	D字刺突文を横方向に 施文	な	し	にぶい赤褐 (Hes10TY 3/4) 褐 灰 (Hes10TY 4/1)	灰 黄 褐 (Hes10TY 3/2)	1mmの黑色砂粒を少し含 む
95	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	ナ デ	斜位刺突文を横方向に 施文	な	し	橙 (Hes7. STB8/4) 褐 灰 (Hes10TY 4/1)	橙 (Hes9TY 4/4)	0. 5~1mmの黄灰色砂 粒を多く含む
96	深鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	腹・横位沈線	な	し	にぶい黄橙 (Hes10TY 3/4) 褐 灰 (Hes10TY 4/1)	黑 褐 (Hes2. ST 3/1)	0. 5mmの黑色光沢物 を多く含む
97	深鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	横位刺突文 横位刺突 縫隙縫縫 縫縫文	な	し	にぶい黄橙 (Hes10TY 3/3)	黄 灰 (Hes2. ST 3/1)	糖 良
98	深鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	縫縫文	な	し	透 青 褐 (Hes10TY 3/3)	浅 黄 褐 (Hes10TY 3/3)	糖 良
99	深鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	横位沈線 縫縫文	な	し	灰 褐 (Hes2. ST 3/2)	灰 白 (Hes2. ST 3/2)	糖 良
100	深鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	透 青 縫縫刺突文	な	し	黄 灰 (Hes10TY 3/3)	黄 灰 (Hes2. ST 3/1)	1mm前後の黄灰色砂粒を 多く含む
101	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を横方 向に施文	な	し	黑 褐 (Hes10TY 3/3) 橙 (Hes7. STB6/4)	黑 褐 (Hes7. STB3/1)	0. 5mmの黒色鉱物を多 く含む
102	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を斜方 向に施文	な	し	黑 褐 (Hes10TY 3/3)	橙 — (Hes7. STB3/4)	0. 5~1mmの黄灰色砂 粒、0. 2~1mmの透明 鉱物を多く含む
103	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を斜方 向に施文 横位短沈線を横方向に 施文	な	し	黑 褐 (Hes7. STB3/3) 橙 (Hes7. STB3/4)	にぶい黄橙 (Hes10TY 3/3) にぶい橙 (Hes7. STB3/4)	0. 5mm前後の白色砂粒、 0. 2~1mmの透明鉱物 を多く含む
104	深鉢 口縁部	ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を横方 向に施文	な	し	橙 (Hes7. STB3/4) 褐 灰 (Hes10TY 4/1)	黑 褐 (Hes7. STB3/1)	0. 1mmの透明鉱物を多 く含む
105	深鉢 口縁部	ナ デ	ナ デ	貼付突帯	な	し	黑 褐 (Hes10TY 3/1)	褐 灰 (Hes10TY 4/1)	1mmの黄灰色砂粒を多く 含む
106	深鉢 口縁部	ナ デ	貝殻条痕	横位短沈線	な	し	褐 灰 (Hes10TY 4/1)	にぶい黄橙 (Hes10TY 3/4)	1. 5mmの赤褐色砂粒を 多く含む
107	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を横方 向に施文	な	し	にぶい黄橙 (Hes10TY 3/4) 褐 灰 (Hes10TY 4/1)	にぶい黄橙 (Hes10TY 3/4) 褐 灰 (Hes10TY 4/1)	1mmの黄灰色砂粒、0. 2mmの黒色鉱物を多く含 む
108	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を横方 向に施文	な	し	オリーブ黒 (Hes7. ST 3/3)	灰 — (Hes7. ST 4/1)	0. 5mmの黄灰色砂粒、 透明鉱物を少し含む
109	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を横方 向に施文	な	し	灰 褐 (Hes2. ST 3/2) 黑 (Hes5T 2/1)	灰 褐 (Hes2. ST 3/2) 黑 (Hes5T 2/1)	1mm以下の透明砂粒、0. 1mm以下の光沢鉱物を多 く含む
110	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を横方 向に施文	な	し	にぶい橙 (Hes7. STB6/4) 黑 褐 (Hes10TY 3/1)	黑 褐 (Hes10TY 3/1)	1mmの透明砂粒を多く含 む
111	深鉢 口縁部	貝殻条痕 ナ デ	貝殻条痕 ナ デ	斜位貝殻縫縁文を横方 向に施文	な	し	黄 灰 (Hes2. ST 4/1)	オリーブ黒 (Hes7. ST 2/1) 明 素 褐 (Hes5T 2/4)	1mmの赤褐色砂粒を少し 含む

第7表 大谷遺跡表探土器観察表（7）

遺物 番号	器種 部位	面		文		様		色		面		胎 土	備考
		外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	内 面		
112	深鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	横文 模位沈線		な	し	暗灰 (B 2/4)	暗灰 (B 2/4)			1mm前後の灰色砂粒を多く含む	
113	深鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	縦・横位沈線 縦文		複位沈線 縦文		黒褐 (Hue+1YR 3/1)	黒褐 (Hue+1YR 3/1)	0.5~1mmの白色砂粒	を多く含む	北久根山式に相当	
114	深鉢 胴部	ミガキ	ミガキ	模位沈線(縫部剥突) 縦文		な	し	黒 (B 1/6) 黄灰 (Hue+1YR 4/4)	黒 (B 1/6)	0.5~1mmの黄灰色砂粒	を多く含む	北久根山式に相当	
115	深鉢 肩部	ミガキ	ミガキ	横位沈線(縫部剥突) 縦文		な	し	黒 (B 1/6) 黄灰 (Hue+1YR 4/4)	黒 (B 1/6)	0.5mmの黄灰色砂粒を多く含む		北久根山式に相当	
116	浅鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	沈線 縦文		な	し	明赤褐 (Hue+2YR 5/8) 黒褐 (Hue+1YR 4/1)	明赤褐 (Hue+2YR 5/8)	0.5~1mmの黄灰色砂粒を多く含む		西平式に相当	
117	台付皿 口縁部	ナデ	ナデ	口部部に斜位貝殻縫縫 文を横方向に施文		斜位貝殻 縫縫文		にぶい赤褐 (Hue+2YR 4/1)	にぶい褐 (Hue+2YR 4/1)	0.5mmの黄灰色砂粒を多く含む			
118	台付皿 口縁部	ナデ	ナデ	な	し	模位沈線 竹管円文		にぶい黄褐 (Hue+1YR 6/4)	黄灰 (Hue+1YR 5/1)	0.5~1.5mmの灰色、 白色砂粒を多く含む			
119	深鉢 口縁部	ナデ	ナデ	模位縫沈線		模位短沈 縫		橙 (Hue+7.5TET 4/6)	オリーブ褐 (Hue+7.5TET 4/6) 灰 (Hue+7.5TET 4/6)	0.2~0.3mmの白色砂 粒を多く含む		曾根式に相当	
120	深鉢 (浅鉢) 口縁部 ～胴部	ナデ	貝殻条痕	梅円状沈線 三日月状沈線 模位貝殻縫縫文を横方 向に施文 フジツボ状突起		な	し	明赤褐 (Hue+2.5YR 5/6) 橙 (Hue+5YR 6/6)	黒褐 (Hue+2YR 3/11)	0.5mmの白色砂粒を多 く含む 1.5mmの金色畫面を少 し含む			
121	深鉢 (浅鉢) 底部	ナデ	貝殻条痕	な	し	な	し	にぶい赤褐 (Hue+2YR 5/4) 明赤褐 (Hue+2.5YR 6/6)	黒褐 (Hue+2YR 3/11) にぶい褐 (Hue+2.5YR 6/6)	0.5mmの白色砂粒を多 く含む			
122	浅鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	模位沈線 逆丁字文 縦文 フジツボ状突起把手		な	し	黒 (Hue+3.5TET 4/6) 暗灰 (B 3/6)	暗オリーブ灰 (Hue+3.5TET 4/6) 暗灰 (B 3/6)	1~1.5mmの白色砂粒 を多く含む 3mmの白色砂粒を少し含 む		雄崎式に 相当	
123	浅鉢 口縁部	ミガキ	ミガキ	模位沈線 縦文 フジツボ状突起把手		な	し	にぶい黄褐 (Hue+1YR 7/4) 黄灰 (Hue+2.5YR 3/1)	にぶい黄褐 (Hue+2YR 3/1)	1.5~2mmの白色砂粒 を多く含む		雄崎式に 相当	



# 図 版



大谷遺跡遠景



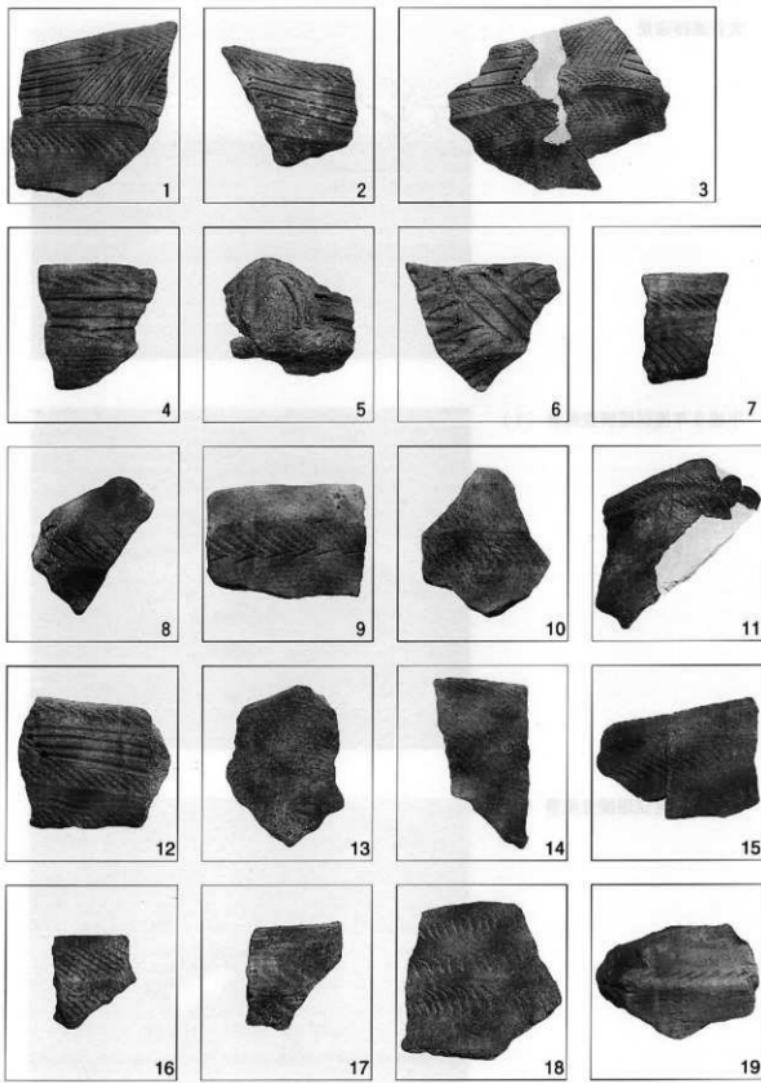
圖版  
1

平成 9 年度試堀調査風景（1）

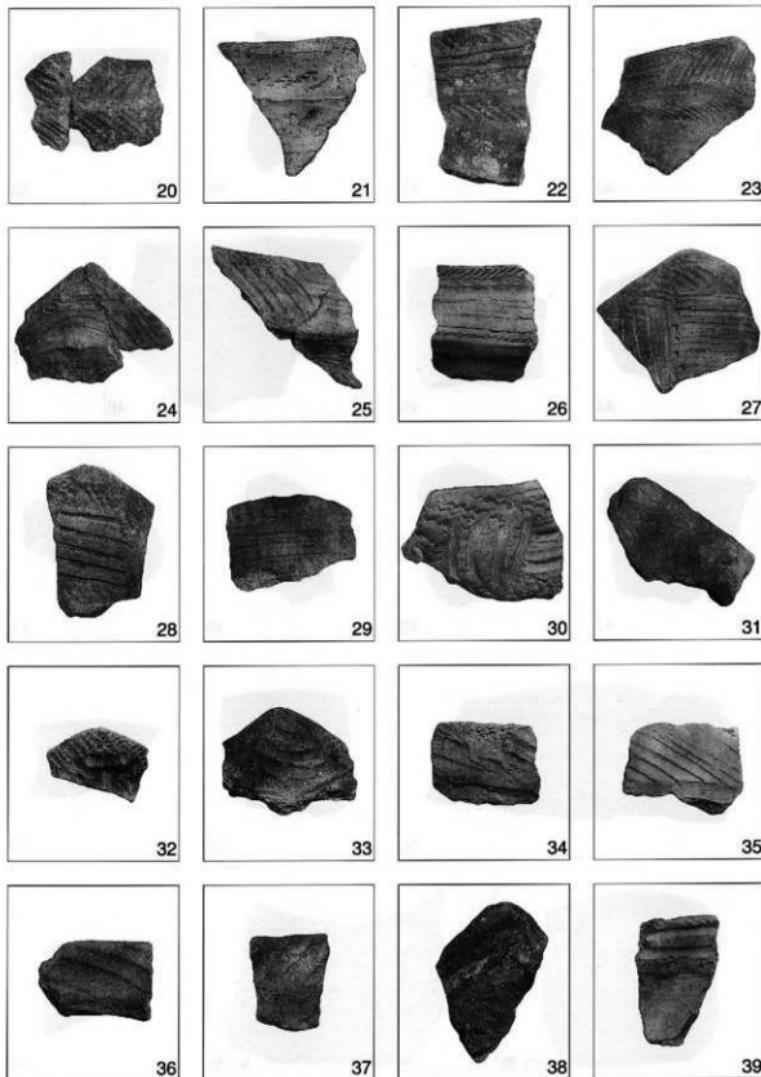


平成 9 年度試堀調査風景（2）

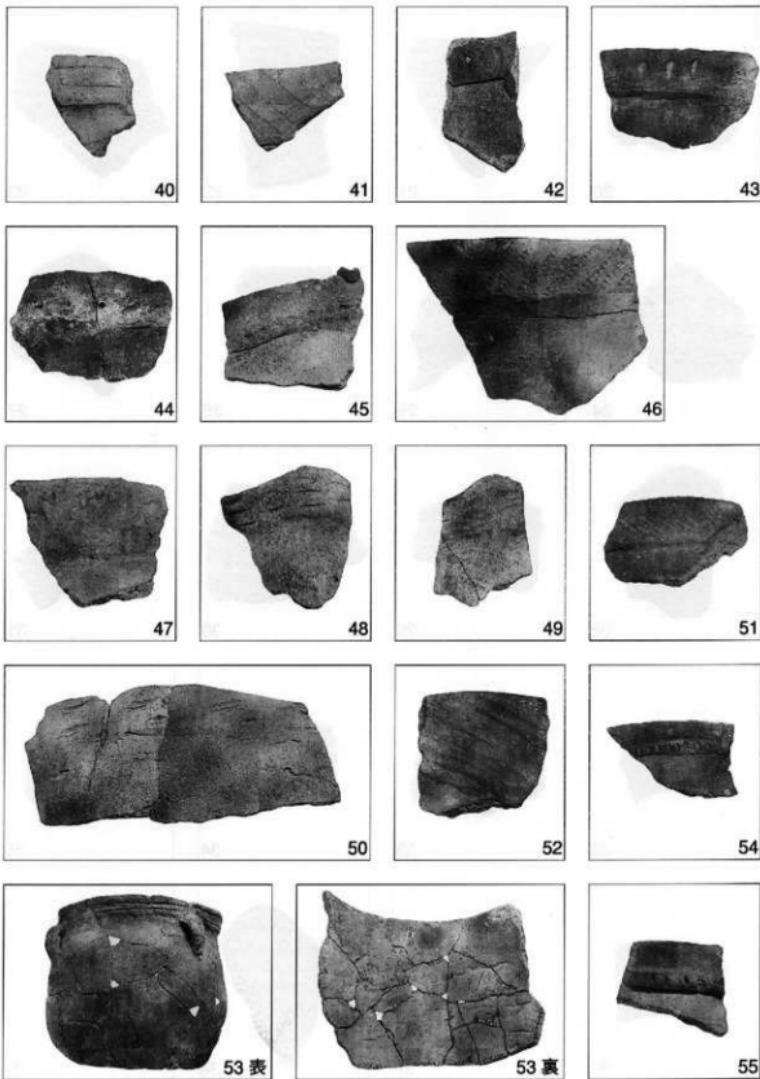




表採遺物（1）



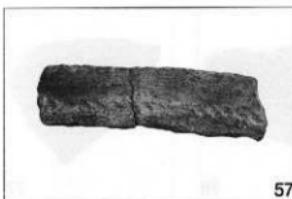
表採遺物（2）



表採遺物（3）



56



58



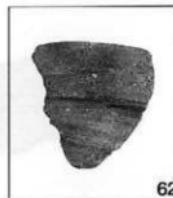
59



60



61



62



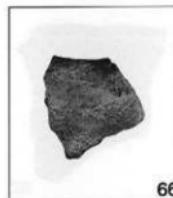
63



64



65



66



67



68



69



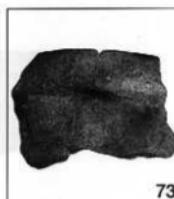
70



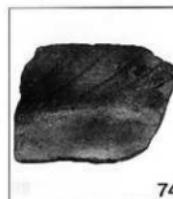
71



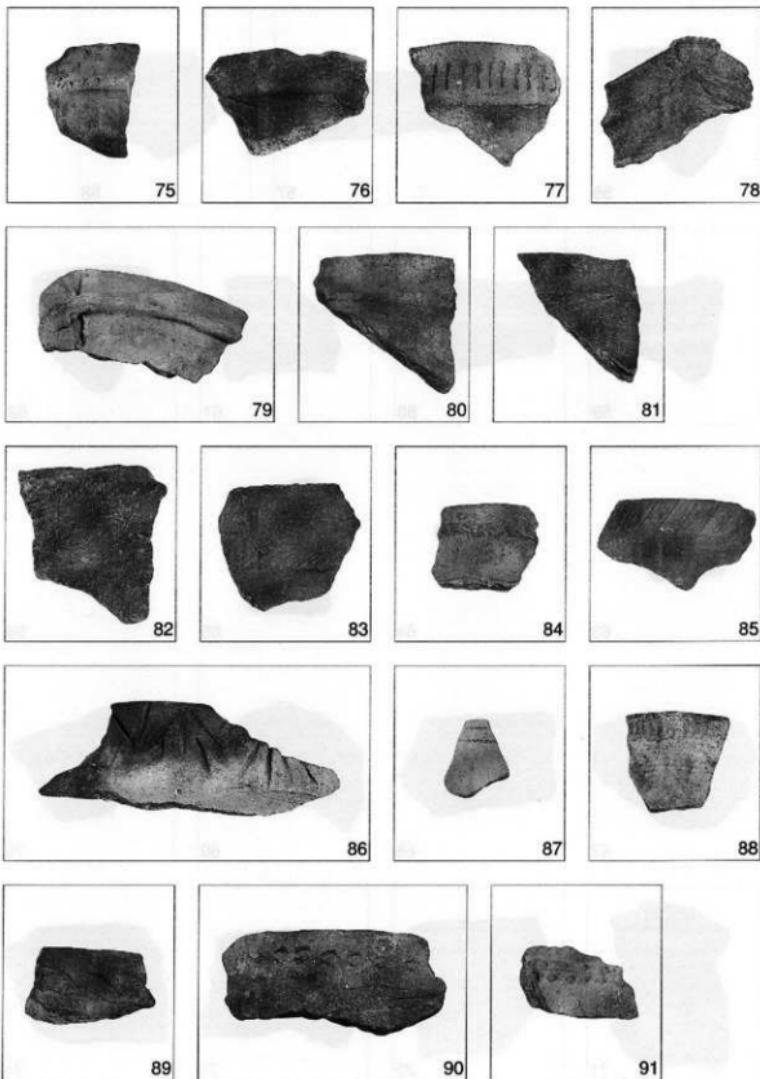
72



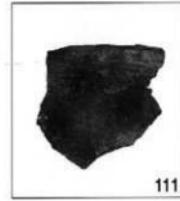
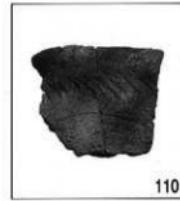
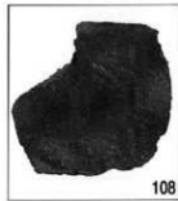
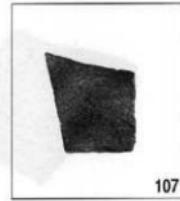
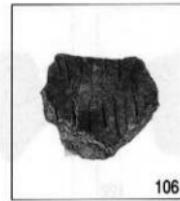
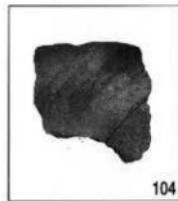
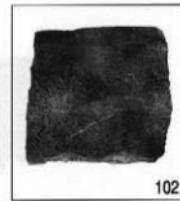
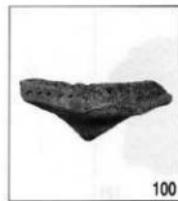
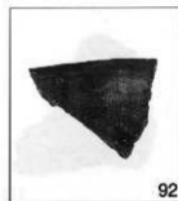
73



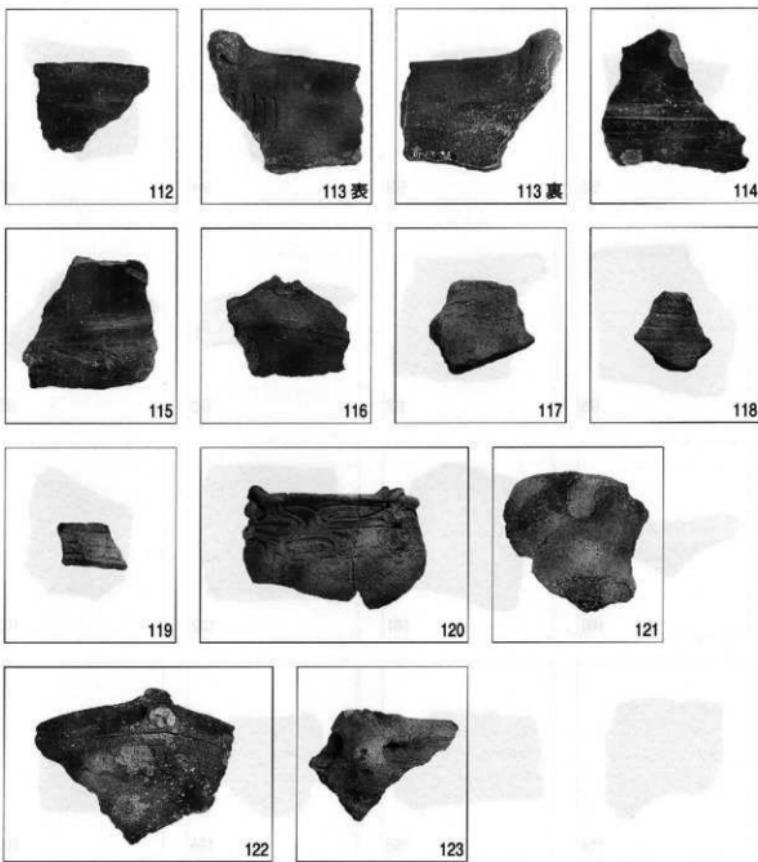
74



表採遺物（5）



表採遺物（6）



表採遺物 (7)

報告書抄録

フリガナ	タカハルチョウマイゾウブンカザイハツツヨウサホウコクショ						
書名	高原町埋蔵文化財発掘調査報告書						
副書名	日守地下式横穴墓群・大谷遺跡表採縄文土器資料						
卷次							
シリーズ名	高原町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第4集						
編集者名	大學 康宏						
発行機関	高原町教育委員会						
所在地	〒889-4492 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓899番地						
発行年月日	1999.3.31						
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
ヒモチカシキ 日守地下式	タカハルチョウオオアサ 高原町 大字	31°55'37"	131°02'26"	19970214 19970307	200m <sup>2</sup>	個人による 原野造成	
オカワホケン 横穴墓群	ケロカワリチアサヒモチ 後川内字日守	付 近	付 近				
	10-1						
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
古 墳	古墳時代	地下式横穴墓 2基	蛇行剣 剣 刀子 鉄 鐵 鎚	1点 1点 1点 6点 2点	・町内初、県内36例目 の蛇行剣及び異形鉄鐵等 の副葬品が確認された。		
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因	
オオタニイセキ 大谷遺跡	タカハルチョウオオアサ 高原町 大字	31°54'54"	130°58'19"				
	ヒロワラアサヒモタニ 広原字 大谷	付 近	付 近				
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
散布地	縄文時代 平安時代	な	し	縄文土器	・縄文時代後期を中心とした 様々な土器型式が確認された。		

高原町文化財調査報告書 第4集  
高原町埋蔵文化財発掘調査報告書

日守地下式横穴墓群  
大谷遺跡表採縄文土器資料

1999年3月

編集・発行 宮崎県高原町教育委員会  
〒889-4492 宮崎県西諸県郡高原町大字西麓899  
TEL 0984-42-2111

印 刷 (株)長崎印刷  
西諸県郡高原町大字後川内17-2